

Sun Java™ System Application Server 7 リリースノート

(旧称 Sun ONE Application Server)

バージョン 7、Update 8

Part No. 819-5412

2005 年 12 月

このリリースノートには、Sun Java System Application Server, Version 7 (旧称 Sun™ Open Net Environment (ONE) Application Server), Update 8 のリリース時における重要な情報が含まれています。

注 このドキュメントおよびマニュアルセットに含まれるほかのマニュアルで、本製品は、「Sun ONE Application Server」という旧称で呼ばれていることがあります。

本書には、拡張機能、インストール時の注意、既知の問題、および最近見つけたその他の問題点が記載されています。Sun ONE Application Server 7, Update 8 を使用する前に、このリリースノートと関連マニュアルをお読みください。

本書の構成は次のとおりです。

- [リリースノートの改訂履歴](#)
- [Sun ONE Application Server, Version 7, Update 8 について](#)
- [重要な情報](#)
- [このリリースで修正されたバグ](#)
- [既知の問題と制限事項](#)
- [再配布可能なファイル](#)
- [問題の報告およびフィードバックの方法](#)
- [補足情報](#)

リリースノートの改訂履歴

この節では、Sun ONE Application Server 7 製品の最初のリリース後に、リリースノートで変更が加えられた箇所について示します。

表 1 改訂履歴

日付	変更の詳細
2005 年 12 月	Sun ONE Application Server 7, Update 8 の初期リリース

Sun ONE Application Server, Version 7, Update 8 について

Sun ONE Application Server 7 は、広範囲にわたるアプリケーションサービスと Web サービスの配備に適した、優れたパフォーマンスの J2EE プラットフォームを提供します。

この節では次の項目について説明します。

- [Sun ONE Application Server 7 の新機能](#)
- [要件と制限事項](#)

Sun ONE Application Server 7 の新機能

Sun ONE Application Server 7 の新機能については、『Sun ONE Application Server 新機能』を参照してください。URL は次のとおりです。

<http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja>

この更新版での変更部分については、[5 ページの「重要な情報」](#)を参照してください。

要件と制限事項

Sun ONE Application Server 7, Update 8 製品でサポートされるプラットフォームについては、『Sun ONE Application Server プラットフォームの概要』を参照してください。URL は次のとおりです。

<http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja>

この節では次の項目について説明します。

- プラットフォームの要件
- Solaris パッチ
- Solaris x86 の制限事項
- 日本語版および簡体字中国語版 Sun ONE Application Server のインストールおよびアップグレード

プラットフォームの要件

Sun ONE Application Server 7, Update 8 の要件を次の表に示します。詳細なプラットフォームの説明は、『Sun ONE Application Server プラットフォームの概要』を参照してください。URL は次のとおりです。

<http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja>

表 2 Sun ONE Application Server のプラットフォームの要件

オペレーティングシステム	アーキテクチャー	最小メモリー	推奨メモリー	最小ディスク容量	推奨ディスク容量
UNIX					
Sun Solaris 8 または 9 SPARC 版	32 ビット / 64 ビット	256M バイト (Sun Java Studio を使用しない場合)	512M バイト	250M バイト	500M バイト
Solaris x86 バージョン 9	32 ビット	512M バイト (Sun Java Studio を使用する場合)			
Red Hat Linux 7.2、 7.3 Red Hat Enterprise Linux 2.1、 3.0					
Microsoft Windows					
Windows 2000 Advanced Server、 SP2	Intel 32 ビット	256M バイト (Sun Java Studio を使用しない場合)	256M バイト (Sun Java Studio を使用しない場合)	250M バイト	500M バイト
Windows 2000 Server、 SP2					
Windows 2000 Professional、 SP2		256M バイト (Sun Java Studio を使用する場合)	512M バイト (Sun Java Studio を使用する場合)		
Windows XP Professional					

Solaris パッチ

Solaris 8 システムには、次の URL の「パッチサポートポータル」から「推奨 & セキュリティーパッチ」に記載されている Sun 推奨パッチクラスタをインストールする必要があります。

<http://jp.sunsolve.sun.com/>

Solaris 8 システムには、パッチ番号 109326-06、108993-23、およびパッチ番号 110934 のパッチを必ずインストールしてください (全リビジョン対象。パッケージベースのインストールのみ)。これらの必須パッチは、インストーラによってチェックされます。これらのパッチがインストールされていないと、Sun ONE Application Server をインストールすることも実行することもできません。最新の推奨パッチクラスタには、これらのパッチが最初から含まれています。

Solaris x86 の制限事項

- Sun ONE Studio プラグイン - Sun Java Studio は Solaris x86 プラットフォームでは使用できないので、Sun Java Studio プラグインはこのリリースには含まれません。
- Solaris のサポート - Solaris x86 リリースは、Solaris 9, Update 2 以降だけでサポートされています。それ以前のバージョンの Solaris ではサポートされていません。
- Java™ Smart Ticket Sample Application は、Solaris x86 プラットフォーム上では動作しません。サンプルアプリケーションを使用するには、Solaris 9, x86 では使用できない Java 2 Platform, Micro Edition Wireless Toolkit (v1.0.4) が必要です。

日本語版および簡体字中国語版 Sun ONE Application Server のインストールおよびアップグレード

Sun ONE Application Server 7, Update 8 には、日本語または簡体字中国語の独立したリリースはありません。既存の Sun ONE Application Server がある場合は、英語版の Update 8 にアップグレードする必要があります。Update 8 にアップグレードしたあとは、ソフトウェアのローカライズ版でも、判明しているすべてのバグが修正されています。

Sun ONE Application Server 7, Update 8 をインストールおよびアップグレードするための詳細な手順は、次の URL にある『Sun ONE Application Server インストールガイド』に記載されています。

<http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja>

ソフトウェアのバージョンごとに別々のアップグレードパスが用意されています。

初期インストール

Sun ONE Application Server 7 がインストールされていない場合は、日本語版または簡体字中国語版の Sun ONE Application Server 7, Update 4 を最初にインストールし、英語版の Update 8 にアップグレードします。

Update 3、Update 4、または Update 5 からのアップグレード

日本語版または簡体字中国語版を Update 3、Update 4、または Update 5 からアップグレードするには、英語版 Update 8 へアップグレードします。アップグレードの手順は、『インストールガイド』に説明されています。

Update 2 以前からのアップグレード

Sun ONE Application Server 7, Update 2 以前がインストールされている場合は、まず、日本語版または簡体字中国語版 Sun ONE Application Server 7, Update 4 へアップグレードし、次に Update 8 の英語版へアップグレードします。

重要な情報

この節では次の項目について説明します。

- [マニュアル](#)
- [アクセシビリティ](#)
- [アップグレードに関する注意事項](#)

マニュアル

Sun Microsystems 製品の全マニュアルは、次の URL から参照できます。

<http://docs.sun.com>

この節では次の項目について説明します。

- [Sun ONE Application Server 7 のマニュアル](#)
- [関連マニュアル](#)

Sun ONE Application Server 7 のマニュアル

この Sun ONE Application Server 7, Update 8 のこのアーリーアクセス版では、このリリースノートのみが更新されています。ただし、製品を配備および使用方法に関する説明については、Sun ONE Application Server 7, Update 6 のマニュアルセットを参照することができます。

注

重大な問題が生じた際は、マニュアルを改訂することもあります。改訂したマニュアルは、このサイトに登録されます。最終更新日は、HTML 版マニュアルの著作権情報と一緒に表示されます。

Sun ONE Application Server 7, Update 6 のマニュアルは、次の URL から参照できます。

<http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja>

Sun ONE Application Server の各マニュアルの Part No. と概要を次に示します。

- 『Product Overview』 - (Part No. 817-2166-10) Sun ONE Application Server 7 について説明します。製品の各エディションで利用できる機能についても説明します。
- 『Server Architecture』 - (Part No. 817-2167-10) 図表を使用しながら、サーバーアーキテクチャーについて説明します。さらに、Sun ONE Application Server アーキテクチャーの利点についても説明します。
- 『新機能』 - (Part No. 817-2165-10) 企業、開発者、および運用向けの、Sun ONE Application Server 7 の新機能について説明します。
- 『プラットフォームの概要』 (改訂) - (Part No. 819-1676) サポート対象のオペレーティングシステム、JDBC ドライバおよびデータベース、Web サーバー、ディレクトリサーバー、ブラウザ、関連するソフトウェアパッケージを一覧します。
- 『入門ガイド』 - (Part No. 817-2170-10) Sun ONE Application Server 7 製品の基本的な使用方法について説明します。初期開発を行う開発者向けの内容ですが、製品評価の担当者が参考にできる情報も含まれています。
- 『インストールガイド』 - (Part No. 819-1000) Sun ONE Application Server とそのコンポーネント (サンプルアプリケーション、管理インタフェース、Sun™ Open Net Environment (ONE) Message Queue) のインストールまたはアップグレードの方法について説明します。
- 『サーバーアプリケーションの移行および再配備』 - (Part No. 817-2181-10) 新しい Sun ONE Application Server 7 プログラミングモデルに従ってアプリケーションを移行する方法について説明します。特に、iPlanet™ Application Server 6.x、Netscape Application Server 4.0 からの移行について詳しく取り上げます。移行例も参照できます。
- 『開発者ガイド』 - (Part No. 817-2171-10) 開発者向けマニュアルの中でもっとも重要なマニュアルです。サーブレット、Enterprise JavaBeans™ (EJBs™)、JavaServer Pages (JSP)、各種 J2EE コンポーネントについて規定した Java のオープンスタンダードモデルに準拠し、Sun ONE Application Server 上で動作する J2EE アプリケーションの基本的な作成方法について説明します。J2EE アプリケーションの設計、セキュリティ、配備、デバッグ、ライフサイクルモジュールの作成方法などについて取り上げます。Sun ONE Application Server のさまざまな用語について説明している用語集も含まれています。
- 『Developer's Guide to Web Applications』 - (Part No. 817-2172-10) J2EE アプリケーションにおけるサーブレットや JavaServer Pages (JSP) の使用方法と、SHTML および CGI の使用方法について説明します。結果キャッシュ機能、JSP のプリコンパイル、セッション管理、セキュリティ、配備などについて取り上げます。
- 『Developer's Guide to Enterprise Java Beans Technology』 - (Part No. 817-2175-10) Sun ONE Application Server 環境におけるエンタープライズ Bean の開発および配備について説明します。コンテナ管理による持続性、読み取り専用 Bean、エンタープライズ Bean に関連付けられた XML ファイルや DTD ファイルなどについて取り上げます。

- 『Developer's Guide to J2EE Features and Services』 - (Part No. 817-2177-10) Java データベース接続 (JDBC)、Java ネーミングおよびディレクトリインタフェース (JNDI)、Java トランザクションサービス (JTS)、Java メッセージサービス (JMS)、JavaMail といった J2EE の機能について説明します。
- 『Developer's Guide to NSAPI』 - (Part No. 817-2177-10) NSAPI プラグインの作成方法について説明します。
- 『Developer's Guide to Web Services』 - (Part No. 817-2174-10) Sun ONE Application Server 環境における Web サービスの開発および配備について説明します。
- 『Developer's Guide to Clients』 - (Part No. 817-2173-10) Sun ONE Application Server 7 の J2EE アプリケーションにアクセス可能な Application Client Container (ACC) クライアントの開発および配備について説明します。
- 『管理者ガイド』 - (Part No. 817-3652-10) 管理者向けマニュアルの中でもっとも重要なマニュアルです。管理インタフェースまたはコマンド行インタフェースを使った Sun ONE Application Server サブシステムと各種コンポーネントの設定、管理、配備について説明します。Sun ONE Application Server のさまざまな用語について説明している用語集も含まれています。
- 『管理者用設定ファイルリファレンス』 - (Part No. 817-2178-10) server.xml ファイルをはじめとする Sun ONE Application Server の設定ファイルの内容について説明します。
- 『セキュリティー管理者ガイド』 - (Part No. 817-2179-10) Sun ONE Application Server 運用環境のセキュリティーの設定および管理について説明します。セキュリティー、証明書、および SSL/TLS 暗号化の概要を説明します。また、HTTP サーバーベースのセキュリティーについても説明します。
- 『J2EE CA SPI Administrator's Guide』 - (Part No. 817-2254-10) Sun ONE Application Server 環境の JCA SPI 実装機能の設定および管理について説明します。管理ツール、プーリングモニター、JCA コネクタの配備、サンプルコネクタとサンプルアプリケーションなどについて取り上げます。
- 『パフォーマンスチューニングガイド』 - (Part No. 817-2180-10) Sun ONE Application Server を使ってパフォーマンスを改善する方法と、なぜそうする必要があるかについて説明します。
- 『Error Messages Reference』 - (Part No. 817-2182-10) Sun ONE Application Server の全エラーメッセージについて解説します。
- コマンド行インタフェースのマニュアルページ - コマンド行インタフェースで実行する全コマンドについて解説します (XML 形式、英語のみ)。
- ユーティリティーのマニュアルページ - Sun ONE Application Server の全ユーティリティーコマンドについて解説します (XML 形式、英語のみ)。
- 管理インタフェースのオンラインヘルプ - Sun ONE Application Server のグラフィカルな管理インタフェースのコンテンツ型オンラインヘルプです。

関連マニュアル

ほかの Sun ONE 製品のマニュアルが、Sun ONE Application Server のマニュアルで参照されている場合があります。

Sun ONE Message Queue マニュアル

Sun ONE Application Server に統合された Sun ONE Message Queue (Sun Java System Message Queue) サブシステムには、独自のマニュアルセットが存在します。次の URL を参照してください。

<http://docs.sun.com/db/prod/s1.s1msgqu?l=ja#hic>

Sun Java Studio 5, Standard Edition マニュアル

Sun ONE Application Server とともに使用できる Sun Java Studio 5, Standard Edition 製品には、独自のマニュアルセットが存在します。次の URL を参照してください。

Sun Java Studio 5, Standard Edition, Update 1 のマニュアル

<http://docs.sun.com/db/prod/java.studio?l=ja>

アクセシビリティ

Sun ONE Application Server 製品のマニュアルは、補助機能を使って読むことができる形式で提供されます。

Sun ONE Application Server は、製品を見やすく、使いやすい形式にカスタマイズする補助機能を提供しています。次のような機能があります。

- ニーモニックおよびキーボードのショートカット
- カスタマイズ可能なフォント
- カスタマイズ可能な色
- カスタマイズ可能なツールバー
- カスタマイズ可能なスタイルシート

注	Solaris™ オペレーティングシステムでは、ウィンドウスタイルマネージャを使って画面の動作を設定します。ニーモニックを使用している場合は、画面の動作を「クリックでウィンドウをアクティブに」に設定します。これに設定していないと、ニーモニックがエラーになる場合があります。
---	--

Sun ONE Application Server の HTML オンラインヘルプを変更するには、ヘルプディレクトリに保存されているスタイルシートを編集します。

```
server_root/lib/install/applications/admingui/adminGUI_war/help
```

管理サーバーを再起動して、変更を有効にします。

アップグレードに関する注意事項

マニュアル全体は Sun ONE Application Server, Update 8 用に更新されていません。ただし、Sun ONE Application Server, Update 8 へのアップグレードに関する説明は、このリリースにも適用されます。その説明は、次の URL にある『Sun ONE Application Server インストールガイド』に記載されています。

<http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja>

このリリースで修正されたバグ

ここでは、顧客から報告された問題のうち、Sun ONE Application Server 7, Update 6、Update 7、および Update 8 で解決されているものを一覧します。

表 3 Sun ONE Application Server 7, Update 6、Update 7、および Update 8 で修正されたバグ

バグ ID	説明
2127923	大もとの appservd が存在しない場合、appservd プロセスによって CPU リソースが占有されていました。
2127992	RH3 Linux では、appservd プロセスが断続的にクラッシュし、その原因は LinuxKernelStats でした (stats-init がオンの場合)。
2130022	「CORE3148: failed to wait on signals」というメッセージが表示されて、Application Server 7.x がクラッシュしていました。
6223368	ACL を作成しても、Application Server 7 の管理コンソールに表示されませんでした。
6285724	HTTP 要求スマグリングの問題。タイプが "GETorPOST / HTTP/1.x" でコンテンツ長と本文を含む要求に対して、Application Server は index.html を返していました。Application Server は接続を閉じずに、本文を読み取り、それを次の要求として処理します。
6286783	サーバーが 2 つの 'コンテンツ長' ヘッダーを含む要求を拒否しませんでした。
6308777	URL に %C0%AE%C0%AE (.. [ドットドット] の UTF-8 形式での表記) が含まれる場合は、JSP のみがシステム内のどこでも実行が許可されます。しかし、コンテキストルートを超えようとした場合は、これが許可されないようにする必要があります。ACL を使用して特定の JSP ファイルを保護する場合は、ユーザー側でこの ACL をワイルドカード ACL に変更または修正して、より多くを保護できるようにすることが必要です。

表 3 Sun ONE Application Server 7, Update 6、Update 7、および Update 8 で修正されたバグ (続き)

バグ ID	説明
6324565	"if-unmodified-since" ヘッダーの処理中に、Web Server が正常に応答しませんでした。'if-unmodified-since' と範囲が指定された要求に対して、実際の内容とともにコード 412 が返されていました。
2127693	Solaris で、ユーザーは Application Server サブエージェントの smux ポートを変更できませんでした。
6197275	Sun ONE Application Server Update 5 を新規にインストールすると、証明書データベースとして cert8.db ではなく、cert7.db が作成されます。
2126023	セキュリティーロールに主体を追加したり、セキュリティーロールから主体を削除したりしても、再配備後に期待どおりの状態になりませんでした。
2126024	サーバー解析を行う HTML では、JSP ソースの表示で URI の末尾に '/' が付加されていました。
2126025	Application Server Reverse SSL Proxy プラグインに MITM 攻撃に対する脆弱性がありました。
2126026	接続プール内で同期が行われないと、デッドロックになる場合があります。
2126242	セッションタイムアウトに最終アクセス時刻が考慮されていないようでした。
6240424	デフォルトのエラーページにクロスサイトスクリプティング脆弱性がありました。

既知の問題と制限事項

この節では、Sun ONE Application Server 7 の既知の問題とその回避方法について、次の項目別に解説します。

注	問題の説明にプラットフォームが明記されていない場合、その問題はすべてのプラットフォームに当てはまります。
---	--

この節は次の項目から構成されています。

- インストール、アップグレードおよびアンインストール
- サーバーの起動とシャットダウン
- データベースドライバ
- Web コンテナ
- EJB コンテナ

- [コンテナ管理による持続性](#)
- [Message Service とメッセージ駆動型 Beans](#)
- [Java トランザクションサービス \(JTS\)](#)
- [アプリケーションの配備](#)
- [ベリファイア](#)
- [設定](#)
- [配備記述子](#)
- [監視](#)
- [サーバーの管理](#)
- [Sun ONE Studio 4 プラグイン](#)
- [サンプルアプリケーション](#)
- [ORB/IIOP リスナー](#)
- [国際化 \(i18n\)](#)
- [マニュアル](#)

インストール、アップグレードおよびアンインストール

この節では、インストール、アップグレードおよびアンインストールに関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
6364366	<p>Application Server 7.0 Update 5 から Application Server 7.0 Update 8 へのアップグレードの際に、アップグレードを開始する前に、不正確なアップグレードバージョンが表示される。'Upgrading Sun One Application Server from 7.0.0_05 to 7.0.0_08' ではなく 'Upgrading Sun One Application Server from 7.0.0_05 to 7.0.0_07' というテキストが表示される</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>

ID	要約
4403166	<p>Microsoft Windows では、パッケージ、パス、またはアプリケーションの名前が 255 文字より長いと、アプリケーションの配備に失敗する</p> <p>Microsoft Windows では、JDK™ の制約により長いパッケージ名やパス名は使用できません。配備用ツールは、配備中にアーカイブからクラスファイルを抽出しようとします。展開したときの名前が 255 文字より長い場合、抽出は失敗します。</p> <ul style="list-style-type: none">長いアプリケーション名の例 <p><code>servlet_jsh_HttpServletRequestWrapper.ear</code> などの J2EE アプリケーション名</p> <ul style="list-style-type: none">長いパッケージ名の例 <p>このサーブレットが次のようなパッケージに存在する場合</p> <pre>servlet_jsh_HttpServletRequestWrapper_1¥ servlet_jsh_HttpServletRequestWrapper_servlet_war¥WEB-INF¥classes¥tests¥ javax_servlet_http¥HttpServletRequestWrapperHttpServletRequestWrapperCon structorTestServlet.class</pre> <ul style="list-style-type: none">長いパス名の例 <p>Sun ONE Application Server が <code>drive ¥:> Sun ¥ApplicationServer</code> としてインストールされている</p> <p>解決法</p> <p>次のいずれかの解決法を選択します。</p> <ol style="list-style-type: none">インストール中に短いディレクトリ構造を作成します。たとえば、デフォルトの <code>drive:¥>Sun¥Appserver7</code> の代わりに <code>drive:>App¥</code> を使用します。<code>create_instance</code> コマンドを使用して、インスタンスの名前を短いものに変更します。たとえば、<code>/instance1/domain1/</code> を <code>/i/d</code> などに変更します。短いパッケージ名、パス名、およびアプリケーション名にします。
4687768	<p>Solaris setup-SDK/JDK で、X ウィンドウを使用しないマシンにコマンド行モードでインストールしようするとエラーが発生する</p> <p>X ウィンドウライブラリがない Solaris システムでは、Sun ONE Application Server インストーラを実行できません。これは、コマンド行モードを使用する場合も同じです。SDK または Webstart の設定ウィザードのインストールフレームワークで使用する AWT オブジェクトをインスタンス化しようすると、インストーラから <code>java.lang.UnsatisfiedLinkError</code> がスローされます。</p> <p>解決法</p> <ol style="list-style-type: none">X ウィンドウのサポートパッケージをインストールしてください。このパッケージは、Sun ONE Application Server のインストールが完了したら削除します。<code>pkgadd</code> コマンドで Sun ONE Application Server パッケージをインストールします。次に、<code>asadmin</code> コマンドで初期ドメインを作成します。

ID	要約
4719600	<p>インストール時に警告メッセージが表示される</p> <p>インストール時に、次のようなエラーメッセージが表示されることがあります。次に例を示します。</p> <pre>WARNING: Couldn't flush system prefs: java.util.prefs.BackingStoreException: Couldn't get file lock. WARNING: Could not lock System prefs.Unix error code -223460600.</pre> <p>解決法</p> <p>これらの警告は無視してください。あるいは、システム設定ディレクトリ (通常は /etc/.java/.systemPrefs) を作成します。システム設定ディレクトリは、通常、JDK インストールスクリプトによって自動的に作成されます。</p>
4737663	<p>Solaris 環境では、パッケージベースの製品と通常の製品を両方インストールすると競合が発生する</p> <p>パッケージベースの製品 (Solaris 9 バンドル版) とインストーラベースの通常の製品を両方インストールすると、競合が発生します。これらの製品は同一の Sun ONE Message Queue ブローカを共有します。このため、ドメイン名やインスタンス名が一意でないと、2 番目のドメインまたはインスタンスを起動するときに次のようなメッセージが表示されます。</p> <pre>SEVERE: JMS5024: JMS サービスのスタートアップに失敗しました SEVERE: CORE5071: 初期化中にエラーが発生しました</pre> <p>デフォルトのドメイン名とインスタンス名が両製品に共通であるという点には、特に注意が必要です。</p> <p>解決法</p> <p>『Sun ONE Application Server 管理者ガイド』の「JMS の管理」の章の説明に従ってください。</p>
4742038	<p>インストールディレクトリの名前に英数字以外の文字が含まれていると、Sun ONE Application Server が起動しない</p> <p>インストールディレクトリの名前に英数字以外の文字 (#、空白文字など) が含まれていると、Sun ONE Application Server が正常に起動しません。この場合、サーバーログファイルは作成されません。Sun ONE Application Server のインストールディレクトリの名前に使用できる文字は、英数字、ダッシュ (-)、下線 (_) のみです。インストール作業の一環として既存の Java 2 SDK ディレクトリを指定するときも、同じルールが適用されます。</p> <p>解決法</p> <p>インストール時には、英数字、ダッシュ、下線の文字のみ使用してディレクトリ名を指定してください。</p>

ID	要約
4742828	<p>サイレントインストーラがユーザーのアクセス権をチェックしない</p> <p>対話型インストーラ (GUI またはコマンド行) は、ユーザーのアクセス権が適切であるかどうかをチェックします。たとえば、Microsoft Windows へのインストールでは admin ユーザー、Solaris へのパッケージインストールでは root ユーザーのアクセス権が必要です。しかし、サイレントインストールでは、このチェックが行われません。パッケージをインストールするアクセス権 (Solaris)、またはサービスを作成するアクセス権 (Microsoft Windows) がないと、インストールは途中で失敗します。</p> <p>解決法</p> <p>サイレントインストールは、適切なアクセス権を持つユーザーが実行してください。</p>
4741190	<p>Solaris へのインストール時、JDK_LOCATION 値に以前のバージョン (Java 2 SDK 1.2 以前) のソフトウェアの格納場所を指定してもインストールが中止されない</p> <p>Sun ONE Application Server 7 には、バージョン 1.4.0_02 以上の Java 2 SDK が必要です。しかし、Solaris 上では、既存の Java 2 SDK (バージョン 1.2 以下) を使用するように指定しても警告メッセージが表示されません。この場合、インストール自体は正常に完了しますが、Sun ONE Application Server が正常に機能しません。これは、以前の JAVA_HOME の設定が残っているからです。</p> <p>解決法</p> <p>インストールプログラムの実行前に、JAVA_HOME の設定を解除します。</p> <p>(ksh の場合): <code>unset JAVA_HOME</code> (csh の場合): <code>unsetenv JAVA_HOME</code></p>
4742171	<p>既存の評価用環境に開発運用環境をサイレントモードでインストールした場合、エラーが報告されない</p> <p>インストーラをサイレントモードで実行するときに発生する問題です。既存の評価用 Sun ONE Application Server 7 (同じディレクトリ内) 上に、新しい Sun ONE Application Server 7 をサイレントモードでインストールする場合、途中でエラーが報告されることなく処理が進行します。既存の評価用インストールファイルは保存されます。</p> <p>解決法</p> <p>新しい開発運用環境をインストールする前に、既存の Sun ONE Application Server 7 環境をアンインストールしてください。</p>

ID	要約
4742552	<p data-bbox="319 241 1300 326">コマンド行モード (サイレントモード) でインストールを行うとき、1 回のインストールセッションで Sun ONE Application Server と Sun ONE Studio 4 Enterprise Edition for Java コンポーネントの両方を選択すると、問題が発生する</p> <p data-bbox="319 348 1300 519">開発運用環境用インストールに影響を及ぼす問題です。コマンド行モード (サイレントモード) のインストールでは、1 回のインストールセッションで、Application Server と Support for Sun ONE Studio 4, Enterprise Edition for Java の両方を選択できます (GUI モードではいずれか一方しか選択できない)。ところが、インストーラは、コンポーネントの依存関係を正しく処理できません。その結果、選択された Sun ONE Application Server コンポーネントではなく管理クライアントコンポーネントをインストールしようとします。</p> <p data-bbox="319 541 394 562">解決法</p> <p data-bbox="319 585 1300 670">GUI モードの場合と同様に、最初にコマンド行モード (サイレントモード) で Sun ONE Application Server コンポーネントをインストールしておきます。その後、新たなセッションで Support for Sun ONE Studio をインストールします。</p> <p data-bbox="169 692 219 713">なし</p> <p data-bbox="319 692 1265 777">Solaris 上で Sun ONE Application Server インストーラを使って既存の Sun ONE Message Queue 3.0 をバージョン 3.0.1 にアップグレードした場合、Sun ONE Application Server のアンインストール時に Sun ONE Message Queue も削除される</p> <p data-bbox="319 800 1300 909">Solaris の開発運用環境用インストーラに影響を及ぼす問題です。システム上の既存の Sun ONE Message Queue 3.0 を自動的にバージョン 3.0.1 にアップグレードできます。しかし、この Sun ONE Message Queue 3.0.1 は、Sun ONE Application Server のアンインストール時に削除されます。</p> <p data-bbox="319 932 394 953">解決法</p> <p data-bbox="319 975 1300 1029">Sun ONE Application Server のアンインストール後も Sun ONE Message Queue を保存しておきたい場合は、次の手順を実行します。</p> <ol data-bbox="319 1052 1300 1223" style="list-style-type: none">1. 自動アップグレードを行うかどうかを確認するメッセージが表示された時点でインストーラを終了します。2. Sun ONE Message Queue のマニュアルの手順に従って Sun ONE Message Queue 3.0.1 へアップグレードします。3. Sun ONE Application Server のインストールを再び実行します。

ID	要約
4746410	<p>Solaris 上のデフォルト以外の場所に Sun ONE Application Server をインストールするとき、パッケージベースのインストーラはディレクトリのディスク容量を正しくチェックしない</p> <p>パッケージベースのインストーラを使って Solaris 上のデフォルト以外の場所に Sun ONE Application Server をインストールする場合、インストールプログラムは、指定したインストール先ディレクトリのディスク容量をチェックしないで、デフォルトで指定された場所 (/opt) のディスク容量をチェックします。</p> <p>解決法</p> <p>インストールを開始する前に /opt のディスク容量が 85M バイト以上あるかどうかを確認してください。これは、/opt をインストールディレクトリに指定しない場合も同様です。さらに、インストールディレクトリのディスク容量が 85M バイト以上あることを確認します。</p>
4748404	<p>Microsoft Windows XP では、サンプルアプリケーションコンポーネントと PointBase 4.2 コンポーネントを追加インストールできない</p> <p>Windows XP プラットフォームに影響を及ぼす問題です。既存の Sun ONE Application Server コンポーネント上に Sample Applications コンポーネントや PointBase 4.2 コンポーネントを追加インストールしようとしても、既存の Sun ONE Application Server が正常に検出されません。その結果、「Application Server Not Found」というエラーメッセージが表示されて、インストールが途中で終了します。</p> <p>解決法</p> <p>Sample Applications コンポーネントや PointBase 4.2 コンポーネントは、Sun ONE Application Server コンポーネントと同時にインストールしてください。Sun ONE Application Server がすでにシステム上に存在する場合は、いったんアンインストールして再インストールします。このとき、必要なコンポーネントをすべて選択します。</p>
4748455	<p>サイレントインストール時にディレクトリエラーが発生する</p> <p>全プラットフォームのサイレントインストールに影響を及ぼす問題です。指定のインストールディレクトリに問題がある場合、「Invalid Installation Directory」というエラーメッセージが表示されます。このエラーメッセージは次のように解釈できます。</p> <ul style="list-style-type: none">• 選択されたディレクトリへの書き込みが許可されていない。• 選択されたディレクトリの名前が空文字列、または空白文字を含む文字列。 <p>解決法</p> <p>指定されたインストールディレクトリを調べ、エラーの原因を特定します。</p>

ID	要約
4749033	<p>Microsoft Windows XP では、スタンドアロンの管理クライアントをアンインストールプログラムでアンインストールできない</p> <p>Windows XP プラットフォーム上のスタンドアロンの管理クライアントに影響を及ぼす問題です。付属のアンインストールプログラムを使ってスタンドアロンの管理クライアントをアンインストールしようとする、不適切なコンポーネントセットが選択され、システムがハングアップします。</p> <p>解決法</p> <p>スタンドアロンの管理クライアントを手動でアンインストールします。ファイルが格納されている <i>install_dir</i> ディレクトリを削除します。関連するプログラムグループのフォルダ (「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Sun ONE Application Server」) も削除します。スタンドアロンの管理クライアントコンポーネントに対応する Microsoft Windows レジストリエントリは存在しません。この手順により、システムは、管理クライアントがインストールされる前の状態に戻ります。</p>
4749666	<p>Sample Application コンポーネントを追加インストールした場合、サンプルドキュメントが初期サーバーインスタンスに公開されない</p> <p>すべてのプラットフォームの開発運用環境用インストーラに影響を及ぼす問題です。Sun ONE Application Server のインストール後、新たなインストールセッションでサンプルアプリケーションをインストールした場合、サンプルドキュメントが初期サーバーインスタンスに公開されません。また、http://hostname:port/samples からアクセスすることもできません。しかし、サンプルドキュメントはファイルシステム上にインストールされているので、次の URL からのローカルアクセスは可能です。 <code>file:///install_root/samples/index.html</code></p> <p>解決法</p> <p>サンプルドキュメントにはローカルからアクセスしてください。</p>
4754256	<p>Solaris 上でインストーラを使って Sun ONE Message Queue をアップグレードする場合、設定ファイルが保存されない</p> <p>インストーラは、システム上で以前の Sun ONE Message Queue 3.0 パッケージを検出すると、自動的に Sun ONE Application Server 用の Sun ONE Message Queue 3.0.1 にアップグレードします。このとき、バージョン 3.0 の Solaris パッケージとともに次の設定ファイルが削除されます。</p> <pre>/etc/imq/passwd /etc/imq/accesscontrol.properties</pre> <p>これらのファイルに変更を加えていた場合、変更内容は失われます。Sun ONE Message Queue 3.0.1 はデフォルトの設定になります。</p> <p>解決法</p> <p>変更が加えられているファイルのバックアップコピーを作成しておき、アップグレードの完了後に復元します。詳細については、『Sun ONE Message Queue 3.0 インストールガイド』を参照してください。</p>

ID	要約
4754824	<p>Solaris 上で、CD からインストールを実行しているときエラーメッセージが表示される</p> <p>CD-ROM ドライブにボリュームを挿入すると、Solaris ボリューム管理によりシンボリック名が割り当てられます。たとえば、デフォルトの正規表現に一致する CD-ROM が 2 枚ある場合、それぞれに <code>cdrom0</code> または <code>cdrom</code> という名前が割り当てられます。追加の正規表現に一致する CD-ROM に対しては、<code>cdrom2</code> で始まる名前が割り当てられます。このことは、<code>vold.conf</code> のマニュアルページで説明しています。CD から Sun ONE Application Server をインストールするたびに、ラベル名と数値から成るマウントポイント名が割り当てられます。最初に CD をマウントしたときは、正常に動作します。2 回目以降のマウントでは、インストーラの起動時に次のエラーメッセージが表示されます。</p> <pre>IOException:java.io.FileNotFoundException: /cdrom/appserver7 No such file or directory) while loading default flavormap.properties file URL:file:/cdrom/appserver7#4/AppServer7/pkg/jre/lib/flavormap.properties</pre> <p>解決法</p> <p>インストーラの機能には影響を及ぼしませんが、次の解決方法があります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コマンドプロンプトに <code>su</code> と入力し、ルートパスワードを入力してスーパーユーザーになります。または、最初から <code>root</code> (スーパーユーザー) としてログインします。スーパーユーザーのコマンドプロンプト (<code>#</code>) が表示されます。 2. <code>/cdrom</code> ディレクトリが存在しない場合は、次のコマンドで作成します。 <pre># mkdir /cdrom</pre> 3. CD-ROM ドライブをマウントします。 <p>注: <code>vold</code> プロセスは、CD-ROM デバイスを管理し、マウントを実行します。<code>/cdrom/cdrom0</code> ディレクトリに、CD-ROM が自動的にマウントされます。</p> <p>ファイルマネージャーを実行している場合は、ファイルマネージャーウィンドウが開き、CD-ROM の内容が表示されます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. CD-ROM がマウントされていないため <code>/cdrom/cdrom0</code> ディレクトリが空になっている場合や、CD-ROM のコンテンツを表示するファイルマネージャーウィンドウが開かない場合は、次のコマンドで、<code>vold</code> デーモンが実行されているかどうかを確認します。 <pre># ps -e grep vold grep -v grep</pre> 5. <code>vold</code> が実行されている場合は、<code>vold</code> のプロセス ID が表示されます。何も表示されない場合は、次のコマンドでデーモンを検索します。 <pre># ps -ef grep vold grep -v grep</pre> 6. 次のコマンドで <code>vold</code> プロセスを停止します。 <pre># kill -15 process_ID_number</pre> 7. CD-ROM を手動でマウントします。 <pre># mount -F hsfs -r ro /dev/dsk/cxytyd0sz /cdrom/cdrom0</pre> <p><code>x</code> は CD-ROM ドライブのドライブコントローラ文字です。<code>y</code> は CD-ROM ドライブの SCSI ID です。<code>z</code> は CD-ROM が置かれているパーティション (スライス) です。</p> <p>これで、CD-ROM ドライブがマウントされました。インストール時の手順については、Solaris のマニュアルで CD のインストールと設定に関する説明を参照してください。</p>

ID	要約
4755165	<p data-bbox="318 239 1286 296">Microsoft Windows で、管理者の認証情報を setup.exe の実行時に提供した場合、インストーラ機能に問題が発生する</p> <p data-bbox="318 317 1296 461">Microsoft Windows プラットフォームのインストールに影響を及ぼす問題です。管理者の特権なしでログインしたユーザーが setup.exe を実行しようとする、管理者のユーザー資格情報の入力を求めるプロンプトが表示されます。正しい資格情報を入力すると、特権のチェックが正常に完了し、インストールが開始されます。ただし、次のような問題が発生することがあります。</p> <ul data-bbox="318 482 1286 583" style="list-style-type: none">• インストールディレクトリを選択する画面で「ブラウズ」ボタンを使用すると、インストーラがハングアップします。• Sun ONE Application Server のプログラムグループエントリが作成されません。 <p data-bbox="318 604 394 628">解決法</p> <p data-bbox="318 649 1233 673">インストールの実行時には管理者の特権を持つユーザーとしてログインしてください。</p>
4757687	<p data-bbox="318 690 1286 781">Solaris 上で、管理クライアントコンポーネントがインストール済みのシステムに Sun ONE Application Server コンポーネントの追加インストールをすると、Sun ONE Application Server が使用できなくなる</p> <p data-bbox="318 800 1305 1058">Solaris プラットフォーム上の Solaris のパッケージベースのインストールに影響を及ぼす問題です。スタンドアロンの管理クライアントコンポーネントがインストールされているシステムに、管理クライアントコンポーネントのインストールディレクトリ以外のディレクトリを指定して Sun ONE Application Server をインストールした場合、インストールに成功したというメッセージが表示されていても、この Sun ONE Application Server を使用することはできません。これは、システム上に管理クライアントの Solaris パッケージがインストールされているからです。これらのパッケージを Sun ONE Application Server と同時にインストールすることはできません。その結果、製品機能を使用するために必要なファイルが見つからないという問題が発生します。</p> <p data-bbox="318 1079 394 1104">解決法</p> <p data-bbox="318 1124 1296 1182">Solaris システム上のスタンドアロンの管理クライアントをアンインストールしてから、Sun ONE Application Server をインストールします。</p> <p data-bbox="318 1203 1296 1260">Sun ONE Application Server の追加インストールも可能ですが、管理クライアントと同じインストールディレクトリを使用する必要があります。</p>

ID	要約
4762118	<p>Solaris 上で、選択されたカスタム設定ディレクトリが選択されたインストールディレクトリのサブディレクトリ etc である場合、インストールが失敗する</p> <p>Solaris プラットフォーム上の Solaris のパッケージベースのインストールに影響を及ぼす問題です。次の組み合わせでカスタムディレクトリを選択すると、ディレクトリのグループの所有権情報に不整合が生じ、インストールが失敗します。</p> <ul style="list-style-type: none">• インストールディレクトリ: <i>install_dir</i>• 設定ディレクトリ: <i>install_dir/etc</i> <p><i>/var/sadm/install/logs</i> ディレクトリ内の <i>pkgadd</i> ログファイルに次のエラーメッセージが書き込まれます。</p> <pre>pkgadd: ERROR: duplicate pathname /install_dir/etc pkgadd: ERROR: unable to process pkgmap</pre> <p>解決法</p> <p><i>install_dir/etc</i> 以外のカスタム設定ディレクトリを選択してください。</p>
4724612	<p>Solaris SPARC および Linux 上で、インストールを行なったユーザー以外が PointBase シェルスクリプトを実行すると失敗する</p> <p>評価版インストールだけに影響を及ぼす問題です。PointBase シェルスクリプトの実行権はインストールを行なったユーザーにだけ付与されます。</p> <p>解決法</p> <p>製品のインストールを行なったユーザー以外がこのスクリプトを実行する必要がある場合は、実行権を 0755 に変更してください。</p>
4762694	<p>Solaris 上で、Sun ONE Message Queue のアップグレード時に Sun ONE Message Queue パッケージ SUNWiqsup が削除されない</p> <p>Solaris だけで発生する問題です。Sun ONE Application Server 7 のインストール時には、Sun ONE Message Queue 3.0.1 がインストールされます。Solaris 上で Sun ONE Message Queue 3.0 が検出された場合、このバージョンはユーザーの承認後にアンインストールされます。その後、バージョン 3.0.1 がインストールされます。</p> <p>アップグレード時、Solaris インストーラが Sun ONE Message Queue 3.0 の Solaris パッケージの一部 (SUNWiqsup) を削除しないというクリーンアップ関連の問題があります。このパッケージは、Sun ONE Message Queue にも Sun ONE Application Server 7 にも悪影響を及ぼしません。したがって、残したままでも問題はありません。</p> <p>解決法</p> <p>root (スーパーユーザー) になり、次のコマンドを使って SUNWiqsup パッケージを手動で削除します。</p> <pre># pkgrm SUNWiqsup</pre>

ID	要約
4890289	<p>Window 2000 Pro 上で、アンインストールプログラムがアンインストールの実行に必要な JDK を見つけることができない</p> <p>Window 2000 Pro 上でアンインストールを実行すると、次のメッセージが表示されて失敗します。</p> <p>The uninstaller could not locate a suitable j2sdk to run the uninstalltion program. Run the uninstalltion again with the -javahome option set to the directory in which j2sdk 1.4.0_02 or greater is installed. Press Enter to exit.</p> <p>解決法</p> <p>JDK の場所として -javahome を使用します。</p>
5017630	<p>Window でアップグレードを行うときに SNMP を実行していると、エラーが表示されてアップグレードが失敗する</p> <p>解決法</p> <p>アップグレードを実行する前に SNMP サービスを停止します。</p> <ol style="list-style-type: none">1. コントロールパネルから「管理ツール」を選択します。2. 「サービス」を選択します。3. SNMP サービスまでスクロールダウンし、それを停止します。
5018162	<p>Linux 上で、指定した Message Queue がすでにインストール済みの場合、完全インストールを行うと、2 つの Message Queue がインストールされる</p> <p>解決法</p> <p>Linux の 4.2.1.xx の rpm ユーティリティーバグにより、インストールされた Sun ONE Message Queue (img) rpm が認識されません。このため、Sun ONE Application Server のインストールは、Sun ONE Message Queue rpm の 2 番目のバージョンをインストールします。この問題を回避するには、rpm のバージョン 4.2.0.69 をシステムにインストールするか、Message Queue をアンインストールしてから Application Server をインストールします。</p> <p>rpm パッケージが Linux の前のバージョンでアップグレードされていない場合は、通常 rpm のバージョン 4.2.1.xx が Red Hat Enterprise Linux Advanced Server 3.0 に収録されています。</p>
5034338	<p>Linux 上で、アップグレードされたパッケージがアンインストールプログラムで削除されない</p> <p>解決法</p> <p>パッケージを手動で削除します。次を入力します。</p> <pre>rpm -e --nodeps SUNWas* packages</pre>

ID	要約
5050621	<p>Linux および Solaris プラットフォーム上で、Sun Java Enterprise 2004Q2 の一部として Sun ONE Application Server 7 Update 3 をインストールし、その後 Sun ONE Application Server をアップグレードすると、問題が発生する。以後、新しいサーバーインスタンスを作成し、Directory Server を有効にした SSL で Sun Java System Identity Server 2004Q2 をインストールしようとする試行は失敗となり、新しく作成されたサーバーインスタンスは、再起動時に SIGSEGV エラーとなってクラッシュする</p> <p>解決法</p> <p>Sun ONE Application Server へのアップグレード後に作成された Application Server のインスタンスについては、サーバーインスタンスの <code>server.xml</code> ファイルを編集し、<code>server-classpath</code> の <code>jss3.jar</code> の正しい場所を次のように指定します。</p> <p>Linux プラットフォームの場合：</p> <p>次の行を変更します。</p> <pre><java-config java-home="/usr/jdk/entsys-j2se" server-classpath="/usr/share/lib/mps/secv1/jss3.jar <---</pre> <p>これを、次のように変更します。</p> <pre><java-config java-home="/usr/jdk/entsys-j2se" server-classpath="//opt/sun/private/share/lib/jss3.jar <----</pre> <p>将来この問題が起こらないようにするには、次のテンプレートファイルも変更します。</p> <pre>\${APPSERVER_INSTALL_DIR}/lib/install/template/server.xml.template.admin \${APPSERVER_INSTALL_DIR}/lib/install/template/server.xml.template</pre> <p>これらのテンプレートファイルで、次の行を変更します。</p> <pre><java-config java-home="%%%JAVA_HOME%%%" server-classpath="/usr/share/lib/mps/secv1/jss3.jar</pre> <p>これを、次のように変更します。</p> <pre><java-config java-home="%%%JAVA_HOME%%%" server-classpath="/opt/sun/private/share/lib/jss3.jar</pre>

ID	要約
5050621 (続き)	<p>Solaris プラットフォームの場合 :</p> <p>server.xml ファイルを変更します。</p> <ol style="list-style-type: none">1. server.xml ファイルを編集するために開きます。ファイルは、 <code>app_server_instance_dir/config/server.xml</code> にあります。2. jss3.jar の場所を <code>server-classpath</code> に追加します : <code>server-classpath</code> <code>=/usr/share/lib/mps/secv1/jss3.jar</code> <p>startserv スクリプトの <code>LD_LIBRARY_PATH</code> を編集します。</p> <ol style="list-style-type: none">1. startserv ファイルを編集するために開きます。スクリプトは、 <code>app_server_instance_dir/bin/startserv</code> にあります。2. <code>/usr/lib/mps/secv1</code> を <code>LD_LIBRARY_PATH</code> に追加します。 <p>将来この問題が起こらないようにするには、次のテンプレートファイルも変更します。</p> <ul style="list-style-type: none">• <code>install_dir/lib/install/template/server.xml.template.admin</code>• <code>install_dir/lib/install/template/server.xml.template</code>• <code>install_dir/lib/install/template/start</code> <p>これらのテンプレートファイルで、次の行を変更します。</p> <pre><java-config java-home="%%%JAVA_HOME%%%" server-classpath="/usr/lib/mps/secv1/jss3.jar</pre> <p>これを、次のように変更します。</p> <pre><java-config java-home="%%%JAVA_HOME%%%" server-classpath="/usr/lib/mps/secv1/jss3.jar</pre>
なし	<p>Red Hat Enterprise Linux AS 3.0 上で、Sun ONE Application Server をインストールする前に、<code>compat-libstdc++</code> (下位互換性を維持するための標準の C++ ライブラリ) をインストールする必要がある</p> <p>解決法</p> <p>Sun ONE Application Server をインストールする前に <code>compat-libstdc++</code> をインストールします。これらのライブラリは、Red Hat Enterprise Linux AS 3.0 の CD セットに収録されています。</p>

ID	要約
なし	<p>Windows に Sun ONE Application Server をインストールすると、次のメッセージが表示される</p> <p>"Error writing native components to disk. Aborting wizard"</p> <p>解決法</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. C:\Documents という名前のファイルがある場合は、それがシステムプロパティー <code>user.home</code> (通常は C:\Documents and Settings\your_name を指す) の処理を妨げます。C:\Documents を削除するか、名前を変更します。 2. さらに、環境変数 TEMP を、既存の書き込み可能なディレクトリを指すように設定する必要があります。

ID	要約
5063872	<p>アップグレードのインストーラを使用して Sun ONE Application Server 7 をアップグレードするときに、app_server_install/samples/common.properties ファイルが null 値で上書きされる</p> <p>解決法</p> <p>最新の Sun ONE Application Server 7 へアップグレードする前に common.properties ファイルのバックアップをとるか、アップグレード後に common.properties に手動で値を加えます。</p> <p>Microsoft Windows プラットフォーム用の common.properties サンプルファイル</p> <pre>com.sun.aas.javaRoot=C¥:/Sun/AppServer7/jdk admin.host=<machinename> admin.port=4848 com.sun.aas.imqLib=C¥:/Sun/AppServer7/imq/lib com.sun.aas.installRoot=C¥:/Sun/AppServer7 admin.user=admin #admin password will not be saved as default. User can enter it and save it manually. #admin.password= sunone.instance=server1 com.sun.aas.webServicesLib=C¥:/Sun/AppServer7/share/lib com.sun.aas.pointbaseRoot=C¥:/Sun/AppServer7/pointbase sunone.instance.port=<port> sunone.instance=server1 admin.user=admin admin.port=4848</pre> <p>Linux プラットフォーム用の common.properties サンプルファイル</p> <pre>com.sun.aas.pointbaseRoot=/export/appserver7ur5/pointbase com.sun.aas.webServicesLib=/export/appserver7ur5/share/lib com.sun.aas.imqLib=/opt/imq/lib com.sun.aas.installRoot=/export/appserver7ur5 com.sun.aas.javaRoot=/usr/java/j2sdk1.4.2_04 #admin password will not be saved as default. User can enter it and save it manually. #admin.password= admin.host=<machinename> sunone.instance=server1 sunone.instance.port=80 admin.user=admin admin.port=4848</pre>

ID	要約
5063872 (続き)	<p>Solaris プラットフォーム用の common.properties サンプルファイル</p> <pre>com.sun.aas.pointbaseRoot=/opt/SUNWappserver7/pointbase com.sun.aas.webServicesLib=/usr/share/lib com.sun.aas.imgLib=/usr/share/lib/img com.sun.aas.installRoot=/opt/SUNWappserver7 com.sun.aas.javaRoot=/usr/j2se #admin password will not be saved as default. User can enter it and save it manually. #admin.password= admin.host=<machinename> sunone.instance=server1 sunone.instance.port=81 admin.user=admin admin.port=4848</pre>

ID	要約
6172916	<p>Sun ONE Application Server をアップグレードするためにアップグレードインストーラを使用したあとに Sun ONE Application Server の再起動に失敗する</p> <p>Solaris プラットフォームでは、次のエラーメッセージが表示されます。</p> <pre>SEVERE (14394): JMS5024: JMS サービスのスタートアップに失敗しました CORE5071: 初期化中にエラーが発生しました</pre> <p>Linux プラットフォームでは、次のエラーメッセージが表示されます。</p> <pre>cp: cannot stat `/etc/opt/imq/passwd': No such file or directory cp: cannot stat `/etc/opt/imq/accesscontrol.properties': No such file or directory Error backing up!</pre> <p>この問題は、アップグレードインストーラがインストールされている Message Queue のバージョンをチェックしないために発生します。インストーラは、Sun ONE Application Server 7 と同梱の Sun ONE Message Queue 3.0.1 SP3 を自動的にインストールします。</p> <p>Sun Java System Message Queue 3.5 がインストールされている場合、アップグレードインストーラは、それを Message Queue 3.0.1SP3 へダウングレードします。</p> <p>Microsoft Windows プラットフォームでは、Sun ONE Application Server インストーラがインストールするのと同じディレクトリに Sun Java System Message Queue 3.5 がインストールされている場合、問題が発生します。エラーは表示されません。</p> <p>解決法</p> <p>まだアップグレードインストーラを実行していない場合：</p> <ol style="list-style-type: none"> 製品をダウンロードしてバイナリを解凍したあと、 <code>untarred_location/sun-appserver7/upgrade</code> ディレクトリへ移動します。 <code>package-list</code> ファイルを開き、Message Queue に関連するすべてのパッケージ名を削除します。 <ul style="list-style-type: none"> Microsoft Windows プラットフォームの場合：<code>imq.zip</code> Solaris Sparc および x86 プラットフォームの場合：<code>SUNWiqdoc</code>、<code>SUNWiqfs</code>、<code>SUNWiqjx</code>、<code>SUNWiqqr</code>、<code>SUNWiqu</code>、<code>SUNWiquc</code>、<code>SUNWiququm</code>、<code>SUNWiqqlpl</code> Linux プラットフォームの場合：<code>imq</code> <p>すでにアップグレードインストーラを使用してアップグレードした場合：</p> <p>Solaris Sparc および x86 プラットフォーム上でのパッケージベースのインストールの場合：</p> <ol style="list-style-type: none"> コマンドプロンプトに、<code>rm -rf /var/imq/instances</code> と入力して Message Queue インスタンスを削除します。 <code>pkgrm</code> を使用して、次のパッケージを削除します。 <code>SUNWiqdoc</code>、<code>SUNWiqfs</code>、<code>SUNWiqjx</code>、<code>SUNWiqqr</code>、<code>SUNWiqu</code>、<code>SUNWiquc</code>、<code>SUNWiququm</code>、<code>SUNWiqqlpl</code> <code>pkgadd</code> を使用して、前の手順で削除したパッケージの正しいバージョンをインストールします。

ID	要約
6172916 (続き)	<p>Linux RPM インストールの場合:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <code>rm -rf /var/imq/instances</code> と入力して、Message Queue インスタンスを削除します。 2. <code>rpm -e imq</code> と入力して、Message Queue のインストールを削除します。 3. <code>rpm -i rpm_location/imq-xxx.rpm</code> と入力して、正しいバージョンの Message Queue をインストールします。xxx は、正しいバージョンの Message Queue です。 <p>Microsoft Windows プラットフォーム、およびすべてのプラットフォームの zip、tar、および評価版インストールの場合:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <code>rmdir app_server_install_dir/imq</code> と入力して、Message Queue のインストールを削除します。 2. ダウンロードされた場所から正しいバージョンの Message Queue を解凍し、インストーラを実行します。
6211610	<p>Solaris SPARC および x86 プラットフォームの場合、Sun ONE System Application Server Platform Edition 7 Solaris 9 OS Update 3 以降 (Solaris 9 オペレーティングシステムの Application Server コンポーネント) からアップグレードするときに、既存のドメインの情報がアップグレード中に失われる</p> <p>解決法</p> <p>アップグレードする前に、<code>/etc/appserver/domains.bin</code> ファイルをバックアップします。アップグレードが完了したら、ファイルのバックアップコピーを復元します。</p>
6283084	<p>Application Server 7.0, Update 7 のソフトウェアライセンス条項の文面で、Update 7 であるべきところが Update 6 となっている</p>

サーバーの起動とシャットダウン

この節では、起動とシャットダウンに関する既知の問題とその解決方法を示します。

ログサービスの create-console 属性の動作

Microsoft Windows では、`server.xml` 内の `log-service` 要素の `create-console` 属性の値を `true` に設定すると (デフォルト設定)、デスクトップ上にウィンドウが開き、サーバーイベントログの内容が表示されます。意図的にこのウィンドウを閉じてても、Application Server インスタンスプロセスが終了したままになることはありません。コンソールウィンドウを閉じると、`appservd.exe` プロセスが終了します。しかし、このサーバーインスタンスプロセスは、ウォッチドッグプロセス (`appservd-wdog.exe`) によってただちに再起動されます。

開発者は、Application Server インスタンスを迅速に再起動する手段として、インスタンスのイベントログウィンドウを閉じる方法を利用することができます。

ただし、Application Server インスタンスを完全に (ウォッチドッグプロセスとともに) 停止する場合は、次の手順を実行してください。

- 管理インタフェースを使用する場合 - 「スタート」-> 「プログラム」-> 「Sun ONE Application Server 7」-> 「Stop Application Server」を選択します。
- コマンド行インタフェースを使用する場合 - `asadmin stop-instance --local=true instance name` を実行します。

これは、ローカル形式の `stop-instance` コマンドです。リモート形式も使用できます。詳細については、`asadmin stop-instance` のヘルプを参照してください。

- 管理コンソールを使用する場合 - サーバーインスタンスを選択し、「停止」をクリックします。

管理コンソールでは、Application Server インスタンスの「ログ」タブの「コンソールを作成」の設定を変更することにより、コンソールイベントログウィンドウの有効または無効を切り替えることができます。

ID	要約
4725893	<p>Solaris 上で、ライセンスの有効期限が表示されない</p> <p>Solaris SPARC の評価用ライセンスに影響を及ぼします。ライセンスの有効期限まで 2 週間以内になっても、コマンド行インタフェースやブラウザベースのインタフェースに警告メッセージが表示されません。この警告メッセージは、サーバーログファイルに書き込まれます。</p> <p>解決法</p> <p>サーバーログファイルを確認してください。</p>

ID	要約
4738648	<p data-bbox="239 239 905 265">JMS service/Sun ONE Application Server の起動が失敗する</p> <p data-bbox="239 288 1219 374">JMS プロバイダ (Sun ONE Message Queue ブローカ) が未配信の持続メッセージを大量に保持している場合、次の問題の発生により、Sun ONE Application Server の初期化時に障害が発生します。</p> <ol style="list-style-type: none"><li data-bbox="239 392 1205 444">1. 未配信のメッセージを全部読み込もうとしてメモリー不足になり、MQ ブローカの処理が中断されます。 <p data-bbox="239 465 315 491">解決法</p> <p data-bbox="239 513 1219 565">MQ ブローカプロセスの Java ヒープサイズを大きくしてください。このためには、JMS サービスの Start Arguments 属性の値を -vmargs -Xmx256m に設定します。</p> <p data-bbox="239 588 1219 640">この属性の設定手順については、『Sun ONE Application Server 管理者ガイド』の「JMS サービスの使用」の章を参照してください。</p> <ol style="list-style-type: none"><li data-bbox="239 663 1133 715">2. MQ ブローカが特定の時間内に初期化シーケンスを完了できない場合、Sun ONE Application Server がタイムアウトになり、中断します。 <p data-bbox="239 736 315 762">解決法</p> <p data-bbox="239 784 1219 871">JMS サービスの Start Timeout 属性の値を大きくします。この属性の設定手順については、『Sun ONE Application Server 管理者ガイド』の「JMS サービスの使用」の章を参照してください。</p>

ID	要約
4762420	<p data-bbox="317 234 1318 267">ファイアウォールの規則により、Sun ONE Application Server の起動に失敗する</p> <p data-bbox="317 282 1318 473">パーソナルファイアウォールをインストールしている場合に発生する問題です。Sun ONE Application Server がインストールされているマシンに厳密なファイアウォール規則を適用すると、管理サーバーおよび Application Server インスタンスの起動時に障害が発生することがあります。管理サーバーおよび Application Server インスタンスは、Sun ONE Application Server 環境でローカル接続を確立しようとしています。これらの接続はローカルのホストではなくシステムのホスト名を使ってポートにアクセスしようとするので、ローカルのファイアウォールの規則に従ってブロックされることがあります。</p> <p data-bbox="317 489 1318 680">セキュリティ上何の問題もない処理に対して、ローカルのファイアウォールが誤った警告を生成することもあります。たとえば、Sun ONE Application Server がポート 3700 で TCP 接続を試行しているのに、「Portal of Doom Trojan」攻撃または同様の攻撃を受けたというメッセージが表示される場合があります。このような問題は、Sun ONE Application Server がローカル通信に使用するポート番号と、既知の一般的な攻撃に使用されるポート番号が重複している場合に発生します。ポート番号が重複しているかどうかの判断基準は次のとおりです。</p> <ul data-bbox="317 696 1318 951" style="list-style-type: none"> • Microsoft Windows プログラムグループの「Start Application Server」を使って Sun ONE Application Server を起動しようすると、次のメッセージとともに処理が失敗します。 <div data-bbox="354 795 1080 874"> <pre> インスタンスを起動できませんでした : domain1:admin-server サーバーの起動に失敗しました : サブプロセスの異常終了 ...</pre> </div> • 管理ログファイルとサーバーインスタンスログファイルに、接続例外と「CORE3186: Failed to set configuration」というメッセージが書き込まれています。 <p data-bbox="317 966 395 999">解決法</p> <p data-bbox="317 1015 1318 1072">Sun ONE Application Server からローカルシステム上のポートに接続できるように、ファイアウォールポリシーを変更します。</p> <p data-bbox="317 1088 1318 1145">攻撃について誤った警告が生成されないようにするには、攻撃関連の規則を変更するか、Sun ONE Application Server が使用するポート番号を変更します。</p> <p data-bbox="317 1161 1318 1218">管理サーバーおよび Application Server インスタンスが使用するポート番号は、次に示す Sun ONE Application Server のインストール先の <code>server.xml</code> ファイルで確認できます。</p> <div data-bbox="354 1234 1090 1291"> <pre> domain_config_dir/domain1/admin-server/config/server.xml domain_config_dir/domain1/server1/config/server.xml</pre> </div> <p data-bbox="317 1307 1182 1340"><code>domain_config_dir</code> はサーバーの初期設定を行なった場所です。次に例を示します。</p> <p data-bbox="317 1355 892 1388">Microsoft Windows の場合 : <code>install_dir/domains/...</code></p> <p data-bbox="317 1388 1132 1421">Solaris 9 以上の統合インストールの場合 : <code>/var/appserver/domains/...</code></p> <p data-bbox="317 1421 892 1454">Solaris 8、9 以上のアンバンドルインストールの場合 :</p> <div data-bbox="317 1454 815 1487"> <pre>/var/opt/SUNWappserver7/domains/...</pre> </div> <p data-bbox="317 1503 1318 1578"><iio-listener> 要素と <jms-service> 要素のポート設定を確認します。これらのポート番号を未使用のポート番号に変更するか、ローカルマシン上のクライアントから同じマシン上のこれらのポートへ接続できるようにファイアウォールポリシーを書き換えます。</p>

ID	要約
4780076	<p>Solaris 上で、Sun ONE Application Server がすべてのインスタンスを root (スーパーユーザー) として起動するため、root 以外のユーザーに root アクセス権が与えられる</p> <p>Sun ONE Application Server を Solaris (バンドル版) の一部としてインストールすると、Application Server の起動に関連する問題が発生します。</p> <ul style="list-style-type: none">• すべての Application Server および管理サーバーは、Solaris の起動時に、自動的に起動します。環境によっては、Solaris の起動時に、インスタンスが起動しない場合もあります。定義されたすべてのインスタンスを起動すると、システム上の利用可能なメモリーに悪影響を与えることがあります。• Application Server インスタンスおよび管理サーバーインスタンスが自動的に起動する際、各インスタンスの起動スクリプトは root (スーパーユーザー) として実行されます。インスタンスレベルの起動スクリプトを変更すると、root 以外が所有するインスタンス起動スクリプトを実行して、root 以外のユーザーが root ユーザーにアクセスできるようになります。 <h3>バックグラウンド</h3> <p>Sun ONE Application Server を Solaris の一部としてインストールすると、<code>/etc/init.d/appserv</code> スクリプトと、<code>/etc/rc*.d/</code> ディレクトリの <code>S84appserv</code> および <code>K05appserv</code> スクリプトへのシンボリックリンクがインストールされます。インストールされたスクリプトは、すべての Application Server と管理サーバーのインスタンスを Application Server の一部として定義します。そのため、Solaris システムの起動およびシャットダウン時に、インスタンスは自動的に起動、停止されます。</p> <p><code>/etc/init.d/appserv</code> スクリプトには、次のコードセクションがあります。</p> <pre>... case "\$1" in 'start') /usr/sbin/asadmin start-appserv ;; 'stop') /usr/sbin/asadmin stop-appserv ;; ... </pre> <p><code>asadmin start-appserv</code> コマンドを実行すると、管理サーバーインスタンスおよび管理ドメインに定義されているすべての Application Server インスタンスが Solaris 起動時に起動します。システムの起動およびシャットダウンスクリプトは root で実行されるので、各 Application Server と管理サーバーのインスタンスも root で実行されます。インスタンスレベルの起動スクリプトは、<code>startserv</code> という名前で <code>instance-dir/bin/startserv</code> に格納されます。インスタンスは、root 以外のユーザーが所有していることがあるため、root 以外のユーザーが <code>startserv</code> スクリプトを変更して、root ユーザーでコマンドを実行する可能性があります。</p> <p>インスタンスが特権を持つネットワークポートを使用している場合は、そのインスタンスの <code>startserv</code> スクリプトは root として実行する必要があります。通常、インスタンスを「実行するユーザー」と設定して、一度インスタンスを root ユーザーで起動したあとは、特定のユーザーで実行されるようにします。</p>

ID	要約
4780076 (続き)	<p>解決法</p> <p>環境に対応した方法を実行してください。</p> <ul style="list-style-type: none">• Application Server と管理サーバーのインスタンスをすべて root で起動する必要はない環境では、<code>/etc/init.d/appserv</code> スクリプトの <code>asadmin start-appserv</code> および <code>asadmin stop-appserv</code> コマンドをコメントアウトして実行されないようにします。• 特定の管理ドメイン (管理サーバーインスタンス、および各ドメインのすべての Application Server インスタンスを含む)、あるいは1つ以上の管理ドメイン内で特定のインスタンスを起動する必要がある環境では、<code>/etc/init.d/appserv</code> スクリプトを変更してドメインやインスタンスを起動するようにするか、あるいは環境に対応した <code>/etc/rc*.d/</code> スクリプトを新たに定義します。• 特定のドメインを起動します。管理ドメインあるいは特定のインスタンスを root 以外のユーザーとして起動する必要がある場合は、必ず <code>-c</code> オプション付きの <code>su</code> コマンドを使って目的のドメインやインスタンスを起動します。 <p>例</p> <p>特定の管理ドメインの起動 - 次のように <code>/etc/rc*.d/</code> スクリプトを変更すると、管理サーバーインスタンス、および特定の管理ドメインに含まれるすべての Application Server インスタンスを root で実行することができます。</p> <pre>... case "\$1" in 'start') /usr/sbin/asadmin start-domain --domain production-domain ;; 'stop') /usr/sbin/asadmin stop-domain --domain production-domain ;; ... </pre>

ID	要約
4780076 (続き)	<ul style="list-style-type: none">特定の Application Server インスタンスを root 以外のユーザーで実行するには、<code>/etc/rc*.d/</code> スクリプトを変更して、<code>-c</code> オプション付きの <code>su</code> コマンドを使用するようにします。 <pre>... case "\$1" in 'start') su - usera -c "/usr/sbin/asadmin start-instance --domain test-domain instance-a" su - userb -c "/usr/sbin/asadmin start-instance --domain test-domain instance-b" ;; 'stop') su - usera -c "/usr/sbin/asadmin stop-instance --domain test-domain instance-a" su - userb -c "/usr/sbin/asadmin stop-instance --domain test-domain instance-b" ;; ... </pre> <p>asadmin のコマンド行インタフェースで利用できる、起動とシャットダウンに関するコマンドの詳細は、『Sun ONE Application Server 管理者ガイド』を参照してください。</p>

データベースドライバ

この節では、データベースドライバに関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4700531	<p data-bbox="318 260 1318 295">Solaris 上で、ORACLE JDBC ドライバのエラーが発生する</p> <p data-bbox="318 303 1318 425">この JDBC ドライバは、JDK 1.4 と連携して機能する Oracle 用の新しいドライバです。Oracle 9.1 データベースと ojdbc14.jar が併用されているために、エラーが発生しています。Oracle 9.0.1.3 データベースを実行している 32 ビット版 Solaris マシンにパッチを適用すれば、問題を修正できます。</p> <p data-bbox="318 434 1318 468">解決法</p> <p data-bbox="318 477 1318 546">Oracle の Web サイトからバグ ID 2199718 のパッチを入手し、サーバーに適用します。次の手順を実行してください。</p> <ol data-bbox="318 555 1318 894" style="list-style-type: none">1. Oracle の Web サイトに移動します。2. 「パッチ」ボタンをクリックします。3. パッチ ID フィールドに「2199718」と入力します。4. 32 ビット版 Solaris の OS パッチをクリックします。次に、Metalink.oracle.com に移動します。5. パッチをクリックします。6. パッチ ID 2199718 を入力します。7. 32 ビット版 Solaris の OS パッチをクリックします。
4707531	<p data-bbox="318 902 1318 972">Solaris 上で、Oracle 9.2 クライアントから Oracle 9.1 データベースにアクセスするとデータが壊れる</p> <p data-bbox="318 980 1318 1050">timestamp 列に続いて number 列が存在する場合、Oracle 9.2 クライアントから Oracle 9.1 データベースにアクセスするとデータが壊れることがあります。</p> <p data-bbox="318 1058 1318 1180">Oracle 9.1 データベースでの ojdbc14.jar ファイルの使用がこの問題の原因となっている可能性があります。Oracle 9.1 データベースを実行している 32 ビット版 Solaris マシンにパッチを適用すれば、問題を修正できます。この JDBC ドライバは、JDK 1.4 と連携して機能する Oracle 用のドライバです。</p> <p data-bbox="318 1189 1318 1223">解決法</p> <p data-bbox="318 1232 1318 1270">Oracle の Web サイトからバグ ID 2199718 のパッチを入手し、サーバーに適用します。</p>

ID	要約
4991065	<p>Oracle JDBC ドライバは、J2EE 1.3 に準拠するように正しく設定する必要がある</p> <p>解決法</p> <p>Type 2 および Type 4 のドライバで、次の設定を行います。</p> <ol style="list-style-type: none">1. JDBC 9.2.0.3 以降を使用します。2. Oracle のデータベースのパラメータ (init.ora) ファイルには compatible=9.0.0.0.0 が必要です。3. ojdbc14.jar ファイルを使用します。4. Sun ONE Application Server を設定して次の JVM プロパティを定義します。 <pre>-Doracle.jdbc.J2EE13Compliant=true</pre> <p>さらに、Type-2 ドライバの場合は、Sun ONE Application Server を起動する環境に ORACLE_HOME と LD_LIBRARY_PATH (\$ORACLE_HOME/lib が必須) の両方を定義する必要があります。たとえば、asenv.conf ファイルに両方のプロパティを追加し、それがエクスポートされたことを確認します。</p>

ID	要約
5022904	<p>DB2 Type 2 ドライバを使用すると、Sun ONE Application Server は、アイドル時間がタイムアウトになったあと、接続が増加する</p> <p>シナリオ: DB2 データベースが誤った datasource クラスで設定されている場合は、接続が正しく閉じられないため、Sun ONE Application Server は接続プールにある接続を使い切ってしまう。</p> <p>解決法</p> <p>この問題を回避するには、DB2 Type 2 ドライバを正しく設定する必要があります。これらの例では、デフォルトの DB2 クライアントフォルダ /opt/IBM を使用します。</p> <ol style="list-style-type: none">1. DB2 サーバーにデータベースエイリアスを使用して、Sun ONE Application Server をホストするマシンに DB2 クライアントをインストールします。2. Application Server インスタンスの startserv スクリプトを変更して、DB2 環境を設定します。Application Server インスタンスの起動スクリプトに、次の行を追加します。<pre>DB2DIR=/opt/IBM/db2/V8.1 export DB2DIR DB2INSTANCE=db2tmp export DB2INSTANCE</pre>3. クライアントはパスワードを持つユーザーが所有しているため、次の値を接続プールに追加します。<pre>user: db2inst1 password: db2inst1 databaseName: sample2 dataSourceName com.ibm.db2.jcc.DB2SimpleDataSource</pre>4. クラスパスを変更して次の値を指定します。<pre>/opt/IBM/db2/V8.1/java/db2jcc.jar /opt/IBM/db2/V8.1/java/db2jcc_license_cu.jar /opt/IBM/db2/V8.1/java/db2jcc_license_cisuz.jar /opt/IBM/db2/V8.1/java/db2java.zip</pre>

Web コンテナ

この節では、Web コンテナの既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4740477	<p>sun-web-app_2_3-0.dtd ファイル内に、タイムアウト要素の構文が正しくない Web キャッシュの例がある</p> <p>この例では、XML キャッシュオブジェクトで <code>timeout</code> 要素を次のように使用するよう設定されています。</p> <pre><timeout> 60 </timeout></pre> <p><code>name</code> パラメータは必須フィールドなので、本来であれば次のように設定しなければなりません。</p> <pre><timeout name="foo">60</timeout></pre> <p>解決法</p> <p>ベリファイアを使用しないでください。</p>

ID	要約
4817642	<p>複数の異なる Web アプリケーションが同じセッション ID を共有できるように設定すると、セキュリティが低下する</p> <p>解決法</p> <p>J2EE 仕様によると、配備した Web アプリケーションごとに、一意のセッションオブジェクト (セッション ID) が割り当てられます。この動作は、Sun ONE Application Server のデフォルトの動作になっています。ただし、インスタンスによっては、複数の異なる Web アプリケーションで同じセッション ID を共有できた方がよい場合があります。そのような場合には、Sun One Application Server の sun-web.xml 配備記述子に特別な配備プロパティを指定して、その特定のアプリケーションが別の Web アプリケーションモジュールを使用するときにセッション ID を再利用できるように、Application Server を設定することができます (Web アプリケーションに最初にアクセスすると、新しい一意のセッション ID が生成される。それ以降に、この特別なプロパティが設定されている別の Web アプリケーションに要求を送信すると、そのクライアントとその Web アプリケーションのために新しいセッション ID は生成されず、同じセッション ID が使用される)。</p> <p>この動作を行うには、配備済みの Web アプリケーションのうち、同じセッションオブジェクトの共有を許可する Web アプリケーションについて、それぞれの reuseSessionId プロパティに true を設定する必要があります。次に例を示します。</p> <pre><?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?> <sun-web-app> <session-config> <cookie-properties> <property name="cookiePath" value = "/" /> <property name="cookieDomain" value = ".sun.com" /> </cookie-properties> </session-config> <property name="reuseSessionID" value="true"/> </sun-web-app></pre> <p>reuseSessionID プロパティが、最後から 2 番目の行で true に設定されています。</p> <p>警告: reuseSessionId プロパティを有効にすると、潜在的にセキュリティが低下する可能性があります (プロパティ自体のセキュリティが脆弱なのではない)。このプロパティは、複数の顧客が同じ Sun ONE Application Server インスタンス上でアプリケーションを実行できるような、ISV などの共有環境では使用しないでください。そのような環境の場合には、デフォルトの J2EE 動作を使用して、同じサーバーインスタンスに配備した複数の異なる Web アプリケーションが個別のセッションオブジェクトを使用する方が、はるかに安全です。</p>

ID	要約
5039545	<p>Sun ONE Application Server から絶対リダイレクトが送信される結果、外部 SSL エンドポイントに問題が発生する</p> <p>解決法</p> <p>sun-web.xml プロパティの <code>relativeRedirectAllowed</code> を追加します。デフォルトは <code>false</code> です。<code>true</code> に設定すると、絶対リダイレクトの代わりに相対リダイレクトが使用できます。</p>

EJB コンテナ

この節では、Enterprise JavaBeans™ (EJB™) に関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4735835	<p>ejbFind メソッドから戻された null の PK を正しく処理できない</p> <p>次のコンテナ管理による持続性 (CMP) の例では、<code>ejbFind</code> から 1 個以上の <code>null</code> が戻されます。なお、ここでは <code>ejbFind</code> が <code>EmployeeEJB Bean</code> によって呼び出され、<code>Bean</code> と同じインスタンス型を戻すものとします。</p> <ol style="list-style-type: none"><code>find insurance.employee where insurance.id == 10</code> <code>insurance</code> に <code>employee</code> が関連付けられていない場合、<code>null</code> を戻します。<code>find all insurance.employee where insurance.id > 10</code> <code>employee</code> を持たない <code>insurance</code> に対して、<code>null</code> を含む集まりを戻します。 <p>結果セット内で最初に <code>null</code> の PK を検出したとき、CMP クライアントは、「<code>param0 cannot be null</code>」という <code>JDOFatalInternalException</code> を受け取ります。</p> <p>単一オブジェクトの検索メソッドの場合、BMP クライアントは、「<code>Null primary key returned from ejbFind method</code>」という <code>EJBException</code> を受け取ります。マルチオブジェクトの検索メソッドの場合、<code>NullPointerException</code> を受け取ります。</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>

ID	要約
4744434	<p>ステートフルセッション Bean の使用時に Sun ONE Application Server が Null Pointer 例外をスローする</p> <p>Sun ONE Application Server の EJB コンテナは、ステートフルセッション Bean をキャッシュに格納することにより、パフォーマンスを改善します。キャッシュのオーバーフローが発生すると (キャッシュ内の Bean 数が max-cache-size を超過すると)、コンテナにより、Bean が非活性化されて、ディスクに退避されます。サーバーは NullPointerException をスローします。この問題は、max-cache-size と cache-resize-quantity の差が 8 より小さいときに発生します。</p> <p>解決法</p> <p>max-cache-size と cache-resize-quantity の差が 8 より大きくなるように設定します。または、max-cache-size の値を 0 に設定して、制限なしのキャッシュを使用します。</p>
4951476, 4967645	<p>Java WSDP 1.2 または 1.3 を使用する場合に、javax.ejb.EJBException: org/dom4j/Element 例外がスローされる</p> <p>注 : Java Web Services Developer Pack (Java WSDP) 1.2 または 1.3 を使用しないアプリケーションでは、この問題による影響はありません。</p> <p>Java WSDP 1.2 または 1.3 がインストールされ、Sun ONE Application Server 7 とともに使用するように設定されている場合、EJB コンテナによって、javax.ejb.EJBException:org/dom4j/Element がスローされる可能性があります。</p> <p>解決法</p> <p>最新の dom4j-full.jar を、server.xml ファイルの server-classpath に追加します。このファイルは、http://dom4j.org からダウンロードできます。このファイルのエントリは、server-classpath 内の appserv-jstl.jar エントリの前に追加する必要があります。</p>
4994366	<p>ejb-link なしで ejb-local-ref を使用すると、エラーが発生する</p> <p>解決法</p> <p>ejb-local-ref には ejb-link が必須です。ejb-local-ref を使用する場合は、ejb-link 値を指定する必要があります。</p>

コンテナ管理による持続性

この節では、コンテナ管理による持続性 (CMP) の既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4732684	<p>Oracle JDBC ドライバの最適化が開始されない</p> <p>コンテナ管理による持続性 (CMP) Bean を使って Oracle データベースを最適化するには、Oracle ドライバファイルをサードパーティーライブラリのデフォルトである、インスタンスの /lib ディレクトリに置くのではなく、server.xml ファイルの classpath-suffix 属性に指定する必要があります。</p> <p>解決法</p> <p>server.xml ファイルの classpath-suffix 属性に Oracle ドライバファイルを追加します。</p>
4734963	<p>配備時にセルフリファレンス CMR による問題が発生する</p> <p>EJB 配備記述子のパーサー ejb-jar.xml は、自己参照のコンテナ管理関係 (CMR)、すなわち ejb-relationship-role を正しく処理しません。1 対多の 1 側のフィールドはスキップされます。</p> <p>解決法</p> <p>1 の側が (<multiplicity> の多側とともに) ejb-relation の先頭に来るように ejb-relationship-role セクションを変更します。</p>

ID	要約
4747222	<p>Oracle のキャプチャスキーマユーティリティは <code>-schemaname</code> が指定されていないと動作しない</p> <p><code>capture-schema</code> ユーティリティでは、<code>-schemaname</code> オプションを指定しないで Oracle データベースからデータベーススキーマ情報を取り込もうとすると、次の問題が発生します。</p> <p>1. すべてのテーブルを取り込もうとした場合 (特定のテーブルを明示的に選択しない場合)</p> <pre>bin/capture-schema -dburl jdbc:oracle:thin:@oraserver:1521:ora -username scott -password tiger -driver oracle.jdbc.driver.OracleDriver -out test.dbschema</pre> <p>次のエラーメッセージが表示されます。</p> <pre>java.sql.SQLException ORA-00942: table or view does not exist.</pre> <p>出力ファイルは壊れています。</p> <p>2. <code>-table</code> オプションを使って 1 個以上のテーブルを指定した場合</p> <pre>bin/capture-schema -dburl jdbc:oracle:thin:@oraserver:1521:ora -username scott -password tiger -driver oracle.jdbc.driver.OracleDriver -table DEPT -out test.dbschema</pre> <p>出力ファイルには指定のテーブルが書き込まれますが、列の情報は書き込まれません。したがって、このファイルで CMP マッピングを行うことはできません。</p> <p>解決法</p> <p>Oracle データベースからスキーマを取り込むときは、必ず <code>-schemaname</code> オプションを使用し、アルファベットの太文字でユーザー名を指定してください。</p> <pre>bin/capture-schema -dburl jdbc:oracle:thin:@oraserver:1521:ora -username scott -password tiger -driver oracle.jdbc.driver.OracleDriver -schemaname SCOTT -out test.dbschema)</pre>
4751235	<p>キャプチャスキーマユーティリティの場合、Oracle または PointBase で <code>-table</code> オプションの値を太文字で指定しないと壊れたファイルが出力される</p> <p>Oracle や PointBase は、二重引用符 ("") で囲まれていない識別子の文字をすべて太文字に変換します。<code>-capture-schema</code> ユーティリティで Oracle または PointBase からデータベーススキーマを取り込むとき、<code>-table</code> オプションの引数として小文字だけ (<code>-table student</code> など)、または太文字と小文字 (<code>-table Student</code> など) でテーブル名を指定すると、正しく処理されません。対応するテーブルの列情報を含まないデータベーススキーマファイルが生成されます。</p> <p>解決法</p> <p>テーブル名はすべて太文字で指定してください (<code>-table STUDENT</code> など)。</p>

Message Service とメッセージ駆動型 Beans

この節では、Java Message Service (JMS)、Sun ONE Message Queue およびメッセージ駆動型 Beans の既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4683029	<p>MQ Solaris/Microsoft Windows スクリプト内の -javahome フラグは、値に空白文字が含まれていると正しく機能しない</p> <p>Sun ONE Message Queue のコマンド行ユーティリティーには、その他の Java ランタイムを指定する -javahome オプションが用意されています。このオプションを使用する際、Java ランタイムのパスに空白文字を含めることはできません。空白文字を含むパスの例を示します。</p> <ul style="list-style-type: none">• Microsoft Windows の場合 : C:\jdk 1.4• Solaris の場合 : /work/java 1.4 <p>この問題は、Sun ONE Application Server インスタンスの起動時に発生します。Sun ONE Application Server インスタンスを起動すると、デフォルトで、対応する Sun ONE Message Queue ブローカインスタンスが起動します。このブローカは、必ず Sun ONE Application Server と同じ Java ランタイムを使用するようにするために、常に -javahome コマンド行オプションを使って起動します。Sun ONE Application Server 用に設定された Java ランタイム (ブローカでも使用可能) のパスに空白文字が含まれていると、ブローカの起動に失敗します。このため、Sun ONE Application Server インスタンスの起動も失敗します。</p> <p>解決法</p> <p>Sun ONE Application Server の Java ランタイムのパスに空白文字が含まれていないことを確認してください。</p>

Java トランザクションサービス (JTS)

この節では、Java トランザクションサービス (JTS) の既知の問題とその解決方法を示します。

復旧

JDBC ドライバの復旧に関する既知の問題があります。Sun ONE Application Server は、これらの問題に対していくつかの回避策を用意しています。デフォルトでは、ユーザーが明示的に指定しないかぎり、これらの回避策は使用されません。

- Oracle JDBC ドライバの問題 - Oracle XA Resource 実装の回復メソッドは、入力フラグとは関係なく、繰り返し同じ未確定 Xid のセットを戻します。XA 仕様によると、トランザクションマネージャーは、最初に TMSTARTSCAN を使って XAResource.recover を呼び出したあと、TMNOFLAGS を使って、Xid が戻されなくなるまで繰り返し XAResource.recover を呼び出します。

Sun ONE Application Server は、Oracle XA Resource の確認メソッドの問題に対する回避策も用意しています。この回避策を適用するには、server.xml ファイルの transaction-service サブ要素に次のプロパティを追加します。

```
oracle-xa-recovery-workaround
```

プロパティ値は必ず true に設定します。

- Sybase JConnect 5.2 ドライバの問題 - JConnect 5.2 ドライバには、JConnect 5.5 では解決されている既知の問題があります。JConnect 5.2 ドライバを使用する場合は、server.xml ファイルの transaction-service サブ要素に次のプロパティを追加して、復旧を有効にしてください。

```
sybase-xa-recovery-workaround
```

プロパティ値は必ず true に設定します。

トランザクション

server.xml ファイルでは、XA 接続と非 XA 接続の区別に res-type を使用します。接続を区別することで、データを駆動するデータソースの設定が識別されます。たとえば、Datadirect ドライバでは、同じデータソースを XA または非 XA として使用できます。

デフォルトでは、データソースは非 XA です。XA に指定してトランザクションの connpool 要素を付加するには、res-type が必要です。トランザクション内で connpool 要素を正常に機能させるには、server.xml ファイルに次の res-type 属性を追加します。

```
res-type="javax.sql.XADataSource"
```

ID	要約
4689337	<p>非 txn コンテキストの XADatasource 接続は使用できない</p> <p>データベースドライバの既知の問題です。非 txn コンテキストの XADataSource 接続では、Autocommit がデフォルトで false に設定されます。</p> <p>解決法</p> <p>トランザクションではなく非 XA データソースクラスを使って、commit または rollback プログラムを明示的に呼び出します。</p>

ID	要約
4700241	<p>トランザクションのタイムアウト値をゼロ以外に設定するとローカルトランザクションの処理時間が長くなる</p> <p>現在のローカルトランザクションマネージャーは、一定のタイムアウト値を持つトランザクションをサポートしません。transaction-service 要素の timeout-in-seconds 属性に 0 より大きい値を指定すると、すべてのローカルトランザクションがグローバルトランザクションとして処理されるため、処理時間が長くなります。さらに、データソースドライバがグローバルトランザクションをサポートしていないと、ローカルトランザクションは失敗します。タイムアウト値が 0 のとき、トランザクションマネージャーは、データソースからの応答を無期限に待機します。</p> <p>解決法</p> <p>timeout-in-seconds の値をデフォルトの 0 に戻します。</p>

アプリケーションの配備

この節では、配備に関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4403166	<p>Microsoft Windows では、長いパス名がサポートされていない</p> <p>この問題については、11 ページの「インストール、アップグレードおよびアンインストール」を参照してください。</p>
4703680	<p>EJB モジュールを (MDB とともに) 再配備すると、リソース競合例外がスローされる</p> <p>Microsoft Windows 2000 上の Sun ONE Studio 4 でメッセージ駆動型 Beans (MDB) を使用するときが発生する問題です。EJB モジュールに特定のキューを使用する MDB が含まれている場合、同じ EJB モジュールを (同じキューを使用する) 同じ MDB とともに再配備すると、リソースの競合が発生します。その結果、(変更済みの) モジュールを使用できなくなります。</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>

ID	要約
4725147	<p>配備する仮想サーバーを選択できない</p> <p>この場合は、仮想サーバー 2 台をまったく同じように設定し、一方をホスト、もう一方をリスナーにします。アプリケーションが 2 台目の仮想サーバーだけに配備されている場合、この仮想サーバーにはアクセスできません。これは、<code>host:port</code> の組み合わせで 1 台目の仮想サーバーが指定されているからです。</p> <p>解決法</p> <p>仮想サーバーのホスト名と元のホスト名が同じにならないようにしてください。特に、同じ HTTP リスナーを使用する場合には注意が必要です。</p>
4734969	<p>Bean パッケージ内の Query クラスでアプリケーションを配備できない</p> <p>コンテナ管理による持続性 (CMP) の <code>code-gen</code> は、<code>concreteImpl</code> 内で JDO Query 変数の完全修飾名を使用しません。Query クラスが抽象 Bean と同じパッケージに格納されている場合は、コンパイルエラーが発生します。</p> <p>解決法</p> <p>Query クラスを別のパッケージに移動させます。</p>
4750461	<p>Solaris で、動的再読み込み時に Sun ONE Application Server がクラッシュする場合があります</p> <p>エンタープライズ Bean 数の多い大規模なアプリケーションを動的に読み込もうとすると、クラッシュが発生する場合があります。動的再読み込み機能は、開発環境で、アプリケーションのマイナーチェンジを迅速にテストするために使用されます。許可されているよりも多くのファイル記述子を使用しようとする、クラッシュが発生します。</p> <p>解決法</p> <ol style="list-style-type: none">1. <code>/etc/system</code> ファイルに、形式を変えずに次の行を追加して、使用可能なファイル記述子の数を増やします。アプリケーションのサイズによって値を調節できます。<pre>set rlim_fd_max=8192 set rlim_fd_cur=2048</pre>2. システムを再起動します。

ベリファイア

この節では、ベリファイアに関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4742545	<p>スタンドアロンベリファイアから EJB クラスが見つからないというエラーが報告される</p> <p>「EJB Class Not Found」(EJB クラスが見つかりません) というメッセージが表示され、テストに失敗することがあります。EJB JAR ファイルによって使用されるエンタープライズ Bean が、同一の EAR アプリケーション内の別の EJB JAR ファイル内にあるその他のエンタープライズ Bean を参照する場合、テスト時に障害が発生します。コネクタ (RAR) に依存する EAR ファイルを検証しようとした場合も、障害メッセージが表示されます。これは、RAR バンドルを、RAR バンドルファイルに依存するエンタープライズ Bean が格納されている EAR ファイル内にパッケージ化する必要がないからです。障害 (コネクタ関連の障害を除く) を報告するのは、スタンドアロンベリファイアだけです。配備コマンドや管理インタフェースによって呼び出されたベリファイアでは、この障害は報告されません。</p> <p>解決法</p> <p>アプリケーション EAR のパッケージ化が正しいことを確認します。ユーティリティ JAR ファイルを使用している場合は、EAR ファイル内にパッケージ化されます。参照エラーを解決するには、<code>asadmin</code> または管理インタフェースを使って配備バックエンドからベリファイアを呼び出します。コネクタ関連の障害が発生する場合は、ベリファイアのクラスパスに、必要なクラスを持つ JAR ファイルを配置します。<code>install_root/bin/verifier[.bat]</code> ファイルを開き、<code>JVM_CLASSPATH</code> 変数の末尾に <code>LOCAL_CLASSPATH</code> 変数を追加できます。<code>LOCAL_CLASSPATH</code> 変数にローカルでクラスを追加したあと、ベリファイアを実行します。</p>

設定

- `java-config` 要素の `env-classpath-ignored` 属性のデフォルト値は `true` です。
- 次のものはこのリリースでは実装されません。
 - `server.xml` ファイルの `java-config` 要素の `bytecode-preprocessors` 属性 (将来のパフォーマンスパッチで提供される予定)
- 次のものはこのリリースでは推奨されません。
 - `is-cache-overflow-allowed`
 - `max-wait-time-in-millis`
- J2EE 1.4 アーキテクチャーの変更により、次のような要素は将来のリリースではサポートされない可能性があります。
 - `mdb-container` 要素の `cmt-max-runtime-exceptions` プロパティ

次の表に、Sun ONE Application Server 7 の設定に関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4742559	<p data-bbox="318 317 1140 343">IPv6 を使用しないネットワークでは、この問題による影響はありません。</p> <p data-bbox="318 366 1286 482">Sun ONE Application Server は、デフォルトで IPv4 を使用します。これは、Sun ONE Application Server を使用できるすべてのプラットフォームでサポートされています。特定のプラットフォームでは、IPv6 がサポートされています。このようなプラットフォームでは、Sun ONE Application Server の設定を変更する必要があります。</p> <p data-bbox="318 499 1300 583">注 : 設定を変更する場合は、プラットフォームで IPv6 が確実にサポートされることを確認してください。IPv4 しかサポートしないシステムに IPv6 関連の設定を適用すると、サーバーインスタンスが起動しなくなることがあります。</p> <p data-bbox="318 600 394 626">解決法</p> <p data-bbox="318 647 708 673">次の手順に従って設定を変更します。</p> <ol data-bbox="318 690 1286 1354" style="list-style-type: none"> 1. 管理サーバーを起動します。 2. 管理インタフェースを起動します (ブラウザに HTTP ホスト名とポート名を指定し、管理サーバーに接続)。 3. IPv6 用に設定する Application Server インスタンスを選択します (server1 など)。 4. ツリービューで HTTP リスナーノードを展開します。 5. IPv6 用に設定する HTTP リスナーを選択します (http-listener1 など)。 6. 「一般」の「IP アドレス」フィールドの値を ANY に変更します。 7. 「詳細」の「ファミリー」フィールドの値を INET6 に変更します。 <p data-bbox="318 1038 1300 1121">「ファミリー」フィールドの値を INET6 に変更しても、IP アドレスとして IPv6 アドレスを選択しないかぎり、IPv4 の機能は有効です。「IP アドレス」の値が ANY の場合、IPv4 と IPv6 の両方のアドレスが有効になります。</p> <ol data-bbox="318 1138 1186 1354" style="list-style-type: none"> 8. 「保存」をクリックします。 9. 左側のペインで、サーバーインスタンスを選択します。 10. 「変更の適用」をクリックします。 11. 「停止」をクリックします。 12. 「起動」をクリックします。サーバーが再起動し、変更内容が有効になります。

配備記述子

この節では、配備記述子に関する既知の問題を示します。

sun-cmp-mapping.xml の問題

- 次のものはこのリリースでは実装されません。
 - check-modified-at-commit
 - lock-when-modified

sun-ejb-jar.xml の問題

- 次のものはこのリリースでは推奨されません。
 - is-cache-overflow-allowed
 - max-wait-time-in-millis

監視

この節では、監視に関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4734595	<p>失敗した接続の合計数を確認するテストで、値が表示されない</p> <p>リファレンス実装 (RI) 内のダブルプーリングによって発生する問題です。</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>
4737227	<p>http-server で FlagAsyncEnabled の値が 1 に設定されない</p> <p>Sun ONE Web Server の既知の問題です。</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>

ID	要約
4752199	<p><code>getPrimaryKey()</code>、<code>getEJBMetaData()</code>、<code>getHomeHandle()</code> メソッドでは、監視 Bean メソッドの属性値が表示されない</p> <p>監視ツールで、エンタープライズ Bean 内の監視可能なメソッドを確認できます。 <code>getPrimaryKey()</code>、<code>getEJBMetaData()</code>、<code>getHomeHandle()</code> メソッドについては、メソッドレベルの監視属性の値が常に 0 になります。</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>

サーバーの管理

この節では次の項目について説明します。

- [コマンド行インタフェース \(CLI\)](#)
- [管理インフラストラクチャー](#)
- [管理インタフェース](#)

コマンド行インタフェース (CLI)

この節では、コマンド行インタフェースに関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4676889	<p>シングルモードで実行する CLI コマンドの文字数が 256 文字を超える場合、オーバーフローが発生する</p> <p>UNIX では、シングルモードで実行する CLI コマンドの文字数が 256 文字を超える場合、コマンドの実行に失敗し、「コマンドが見つかりません」という次のエラーが表示されます： ..<code>Command Not Found</code>...</p> <p>これは端末の問題で、CLI の制限ではありません。</p> <p>例</p> <pre>create-jdbc-connection-pool --instance server4 --datasourceuser admin --datasourcepassword adminadmin --datasourceclassname test --datasourceurl test --minpoolsize=8 --maxpoolsize=32 --maxwait=60000 --poolresize=2 --idletimeout=300 --connectionvalidate=false --validationmethod=auto-commit --failconnection=false --description test sample_connectionpoolid)</pre> <p>解決法</p> <ol style="list-style-type: none">1. 実行するコマンドの文字数が 256 文字を超える場合は、マルチモードを使用してください。2. シングルモードを使用する必要がある場合は、OpenWindows コマンドツール (<code>cmdtool</code>) を使ってコマンドを実行してください。
4680409	<p>SSL を使用するように設定したあと、CLI からブラウザクライアントからも管理サーバーにアクセスできない</p> <p>解決法</p> <p>SSL を使って管理サーバーにアクセスする各クライアントに Sun ONE Application Server 証明書をインポートし、この証明書を持ったサーバーが信頼できるサーバーであると規定します。証明書をインポートして信頼を獲得する方法は、ブラウザによって異なります。詳細については、ご使用のブラウザのオンラインヘルプを参照してください。</p> <p>CLI では、サーバーの証明書が <code>servercert.cer</code> ファイル内にあり、インストールディレクトリが <code>/INSTALL</code> である場合、次のコマンドを実行します。</p> <pre>keytool -import -file servercert.cer -alias server -keystore /INSTALL/jdk/jre/lib/security/cacerts</pre> <p>注：この問題の発生を防止するには、管理サーバーが SSL を使用するように設定する前に、サーバーとクライアントの両方に管理サーバーの証明書をインストールしておきます。</p>

ID	要約
4688386	<p>シングルモードの CLI コマンドでアスタリスク (*) を使用すると、予期しない結果になる。または、エラーメッセージが表示される</p> <p>アスタリスクは、シェルによって複数の名前のリストに変換されます。コマンド行インタフェース (CLI) コマンドは、このリストの情報を受け取ります。複数の名前のリストに変換されるのを防ぐには、アスタリスクを引用符で囲みます。この場合、CLI はアスタリスクそのものを受け取ります。</p> <p>解決法</p> <p>アスタリスクを引用符または二重引用符で囲みます。</p>
4701361	<p>変更を繰り返し適用するとメモリー不足エラーになる</p> <p>管理サーバーは、メモリーを使用して、システムの全変更記録を保持しています。再設定を行うと、この変更記録 (変更内容自体ではない) は破棄され、メモリーが解放されます。</p> <p>解決法</p> <p>asadmin reconfig コマンドを定期的に行い、古い変更記録を破棄してください。</p>
4704328	<p>重複したドメインを作成する呼び出しに失敗したとき、クリーンアップが行われない</p> <p>既存のドメインと重複するドメインを作成すると、適切なエラーメッセージが生成されます。この場合、同じ名前のディレクトリが存在しない場合には、create-domain コマンドに -path オプションで指定されたディレクトリが作成されます。このディレクトリを削除しないと、コマンドの実行に失敗します。</p> <p>解決法</p> <p>-path オプションによって作成されたと思われる余分な空ディレクトリをすべて削除します。</p>
4708813	<p>デフォルト (pointbase) 接続プール JDBC リソースを監視できない</p> <p>JDBC 接続プールは、オンデマンドで動的に作成されます。つまり、プールははじめて使用するとき作成されます。プールが作成されていない (使用されていない) 場合、監視を行うことはできません。</p> <p>解決法</p> <p>任意の接続プールを作成して、監視を行います。</p>

ID	要約
4722007	<p>監視: 1 ミリ秒よりも短い実行時間を測定できない</p> <p>エンティティー Bean メソッドを監視しているとき、<code>execution-time-millis</code> 属性の値が -1 になります。たとえば、次のコマンドを実行するとします。</p> <pre>iasadmin>get -m server1.application.usecase1app.ejb-module.UseCase1Ejb_jar.entity-bean. BeanOne.bean-method.method_create0.*</pre> <p>次の属性が戻されます。</p> <pre>Attribute name = total-num-errors Value = 0 Attribute name = method-name Value = public abstract com.ipplanet.ias.perf.jts.UseCase1.ejb.BeanOneRemote com.ipplanet.ias.perf.jts.UseCase1.ejb.BeanOneHome.create() throws javax.ejb.CreateException, java.rmi.RemoteException Attribute name = total-num-calls Value = 0 Attribute name = total-num-success Value = 0 Attribute name = execution-time-millis Value = -1</pre> <p>監視を開始する前に、<code>execution-time-millis</code> のデフォルト値は -1 に設定されます。これは、その時点で属性値が無効であることを示すためです。このように非常に低い値が設定されるのは、デフォルト値が 0 になっていると、すでに実行時間が測定されていたと誤って判断されるからです。</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>
4733109	<p>コマンド行インタフェースで作成した持続マネージャーファクトリリソースを表示しているとき、管理インタフェースにベリファイアのエラーが報告される</p> <p>コマンド行インタフェースで作成された持続マネージャーファクトリリソースを管理インタフェースに表示しているとき、リソースに関する次のエラーが報告されます。</p> <pre>ArgChecker Failure: Validation failed for jndiName: object must be non-null</pre> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>

ID	要約
4742993	<p data-bbox="318 239 1300 296">Solaris で、Solaris に統合されている Sun ONE Application Server 上で flexanlg コマンドを使用すると、オープン障害が発生する</p> <p data-bbox="318 317 1300 404">Solaris オペレーティング環境に統合されている Sun ONE Application Server を実行している場合、/usr/appserver/bin から flexanlg コマンドを実行すると、オープン障害エラーが発生します。</p> <pre data-bbox="318 421 1290 505">ld.so.1: /usr/appserver/bin/flexanlg: fatal: libplc4.so: open failed: No such file or directory Killed</pre> <p data-bbox="318 526 394 550">解決法</p> <p data-bbox="318 571 639 595">次の手順を実行してください。</p> <ol data-bbox="318 616 1005 644" style="list-style-type: none">1. LD_LIBRARY_PATH ファイルに次のエントリを追加します。 <pre data-bbox="318 661 491 685">/usr/lib/mps</pre> <ol data-bbox="318 706 725 734" style="list-style-type: none">2. flexanlg コマンドを実行します。 <pre data-bbox="318 751 733 775">% /usr/appserver/bin/flexanlg</pre>
4750518	<p data-bbox="318 796 1025 821">ターゲット管理サーバー上で一部の CLI コマンドが動作しない</p> <p data-bbox="318 841 1300 928">ターゲット管理サーバーの CLI では、create、delete、list コマンドを使って、管理サーバーの server.xml ファイル内で新しい要素 (SSL、mime、プロファイラ、リソースなど) を作成、削除、一覧表示することができません。</p> <p data-bbox="318 949 394 973">解決法</p> <p data-bbox="318 994 1269 1052">管理サーバー内で要素を作成、削除、一覧表示するには、管理インタフェースを使用します。</p>

管理インフラストラクチャー

この節では、管理インフラストラクチャーに関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4676888	<p>Microsoft Windows 2000 では、JVM ヒープサイズが大きいと JVM を作成できない</p> <p>Windows 2000 で JVM ヒープサイズを大きくしようとすると、次のエラーメッセージが表示されます。</p> <pre>Error occurred during initialization of VM, Could not reserve enough space for object heap Internal error: unable to create JVM</pre> <p>解決法</p> <p>Windows 2000 で、Sun ONE Application Server の JAVA ヒープサイズを大きくするには、Sun ONE Application Server の DLL を再設定 (rebase) する必要があります。</p> <p>Microsoft Framework SDK と Microsoft Visual Studio に付属している Rebase ユーティリティーを使って、複数の DLL に、アドレスから始まる (JVM ヒープの可用性を向上させる) 最適なベースアドレスを設定できます。SDK Help Rebase トピックでは、アドレス 0x6000000 の使用を推奨しています。Rebase ユーティリティーの詳細については、次の URL を参照してください。</p> <p>http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/tools/tools/performance_tools.asp</p> <p>要件</p> <ul style="list-style-type: none">• 2 ～ 4G バイトのメモリーを持つ Windows 2000 システム• Visual Studio または Microsoft Framework SDK の Rebase ユーティリティー <p>S1AS 動的ライブラリに Rebase ユーティリティーを適用するには、次の手順に従ってください。</p> <ol style="list-style-type: none">1. cd コマンドを使って <code>install_dir¥bin</code> に移動します。2. <code>rebase -b 0x6000000 *.dll</code>3. <code>cd ../lib</code>4. <code>rebase -b 0x6600000 *.dll</code>

ID	要約
4686003	<p>HTTP の QOS 制限が適用されない</p> <p>サービス品質 (QOS) では、最大 HTTP 接続数と帯域幅を指定できます。これらの属性の制限値を超えると、クライアントに 503 エラーが戻されます。しかし、管理インタフェースを使って QOS を有効にすると、サーバーは QOS の制限を適用しなくなります。</p> <p>解決法</p> <p>QOS 機能をすべて有効にするには、仮想サーバーの <code>obj.conf</code> ファイル内のデフォルトオブジェクトの先頭に <code>AuthTrans fn=qos-handler</code> 行を手動で追加します。<code>qos-handler</code> サーバーアプリケーション関数 (SAF) と <code>obj.conf</code> 設定ファイルについては、『Developer's Guide to NSAPI』を参照してください。</p>
4692673	<p>デバッグモード以外のモードで実行していたインスタンスをデバッグモードで再起動すると、失敗することがある</p> <p>「デバッグモードで起動または再起動」チェックボックスをオフにした状態でインスタンスを起動すると、このチェックボックスに関連した設定が機能しなくなります。たとえば、管理インタフェースで「デバッグを有効」チェックボックスを選択しても、チェックボックスはオンになりません。<code>server.xml</code> ファイルの <code>debug-enabled</code> 行の値も <code>false</code> になります (<code>debug-enabled=false</code>)。</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>
4699450	<p>Microsoft Windows 2000 で EAR ファイルを配備する際、生成されたファイルのパスの長さが全体で 260 文字を超えると失敗する</p> <p>Windows 2000 では、Java 仮想マシン (JVM) の制限により、生成されたファイルのパス名は 260 文字以下と定められています。これは、JVM の Microsoft Windows サポートに関する問題であり、J2SE 1.5 リリースで修正される予定です。</p> <p>解決法</p> <p>アプリケーションを配備するとき、パスとファイル名の文字数の合計が 260 文字以内に収まるようにします。</p>

ID	要約
4723776	<p>Solaris で、SSL 対応の環境に移行すると、サーバーの起動に失敗する</p> <p>証明書をインストールし、セキュリティを有効にしたあと、Sun ONE Application Server を再起動しようとするとき失敗します。サーバーがパスワードの受け取りに失敗したというメッセージが表示されます。「起動」ボタンを再度クリックすると、サーバーが起動します。SSL が有効になっていないと、パスワードがキャッシュに格納されず、再起動に失敗します。restart コマンドは、非 SSL モードから SSL モードへの移行をサポートしません。</p> <p>注: この問題は、サーバーをはじめて再起動するときだけ発生します。2 回目以降の再起動は正常に行われます。</p> <p>解決法</p> <p>この問題が発生したら、次のことを行なってください。</p> <p>「起動」をクリックします。</p> <p>この問題が発生するのを防ぐには、「再起動」ボタンをクリックしないで、次の手順を実行してください。</p> <p>「停止」をクリックします。</p> <p>「起動」をクリックします。</p>
4724780	<p>別のシステムで作成されたドメインでは管理サーバーを起動できない</p> <ul style="list-style-type: none">PCNFS がマウントされたドライブで作成されたドメインでは、PCNFS ドライブに関する Microsoft の既知の問題により、管理サーバーとその他のインスタンスを起動できません。ディレクトリパスが異なっても、製品がインストールされているローカルドライブで作成されたドメインであれば、管理サーバーもインスタンスも正常に動作します。 <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>
4734184	<p>Microsoft Windows 2000 でコンソールが無効になることがある</p> <p>まれに、配備時やコマンドの実行時に管理サーバーや Application Server インスタンスがハングアップすることがあります。この問題は、コンソールログのテキストが選択されている場合に発生します。テキストの選択を解除すれば、処理は続行します。</p> <p>解決法</p> <p>log-service create-console 属性を false に設定して、server1 インスタンスのコンソール自動作成機能を無効にします。コンソールログ上でマウスボタンをクリックするか Enter キーを押しても問題を解決できます。</p>

ID	要約
4736554	<p>サーバーから安全な HTTP リスナーを削除したあとも、(もう存在しない) パスワードの入力を求めるプロンプトが表示される</p> <p>解決法</p> <p>サーバー全体を削除し、追加し直します。</p> <p>注: この問題の発生を防止するには、HTTP リスナーを削除する前に、次のコマンドを使ってセキュリティの設定を無効にします。</p> <pre>/export2/build/bin/> asadmin set --user admin --password adminadmin server1.http-listener.http-listener-1.securityEnabled=false Attribute securityEnabled set to false. /export2/build/bin/> asadmin delete-http-listener --user admin --password adminadmin ls2 Deleted Http listener with id = ls2</pre>
4737756	<p>Microsoft Windows 2000 で、コンソールにメッセージが正しく表示されない</p> <p>Windows 2000 の英語以外のロケール (日本語ロケールなど) では、コンソールにメッセージが正しく表示されないことがあります。</p> <p>解決法</p> <p>管理インタフェースを使ってログメッセージを表示します。</p>

ID	要約
4739831	<p>インスタンスの一部が削除されていると、一部の CLI コマンドから正しい応答を得ることができない</p> <p>サーバーインスタンスの一部が削除されていると、一部の CLI コマンドで問題が発生します。以下に、問題とその解決方法を示します。</p> <ol style="list-style-type: none">1. <code>create-instance</code> をローカルモードで実行すると、サブディレクトリが存在していない場合も、インスタンスフォルダ内にインスタンスが存在すると報告される <p>解決法</p> <p>残りのインスタンスディレクトリを手動で削除してから <code>create-instance</code> コマンドを実行します。</p> <ol style="list-style-type: none">2. <code>list-instances</code> コマンドをローカルモードで実行すると、インスタンス名と状態情報が一部削除された状態で出力される <p>解決法</p> <p>残りのインスタンスディレクトリを手動で削除してから <code>list-instance</code> コマンドを実行します。</p> <ol style="list-style-type: none">3. Microsoft Windows 2000 で、<code>start-instance</code> コマンドをリモートモードで実行すると、<code>null</code> 文字列が表示される <p>解決法</p> <p>残りのインスタンスディレクトリを手動で削除し、新しいインスタンスを作成してから <code>start-instance</code> コマンドを実行します。</p> <ol style="list-style-type: none">4. Microsoft Windows 2000 で <code>stop-instance</code> コマンドをローカルモードまたはリモートモードで実行すると、不正な例外が報告される。ローカルモードでは、インスタンスが実行されていないという不正なメッセージが表示される。リモートモードでは、<code>null</code> 文字列が表示される <p>Solaris で、<code>stop-instance</code> コマンドをローカルモードで実行すると、実際には <code>config</code> というディレクトリは存在しないのに、インスタンスの <code>config</code> ディレクトリにアクセスするアクセス権がないというメッセージが表示されます。</p> <p>解決法</p> <p>インスタンスディレクトリを手動で削除します。</p>
4739891	<p>仮想サーバーによって参照されるデフォルトの Web モジュールが存在しない場合、またはこのモジュールの配備が取り消された場合、仮想サーバーを削除しようとするとき失敗する</p> <p>解決法</p> <p>仮想サーバーの「デフォルト Web モジュール」フィールドの値を「何も選択されていません」に設定し、「了解」をクリックして変更内容を保存します。その後、仮想サーバーを削除します。</p>

ID	要約
4740022	<p>SNMP: 新しいインスタンスサーバーを追加して起動すると、「END OF MIB」メッセージが表示される</p> <p>インスタンスサーバーとサブエージェントをシャットダウンしないで新しいインスタンスを追加し、起動すると、END OF MIB メッセージが表示されます。</p> <p>解決法</p> <ol style="list-style-type: none">1. 新しいインスタンスを表示するには、サブエージェントとすべてのインスタンスサーバープロセスをシャットダウンします。各サーバー -> 「監視」-> 「SNMP 統計収集を有効」をオンに設定します。その後、各インスタンスサーバーを再起動し、サブエージェントプロセスを1つだけ再起動します。2. サブエージェントがすでに実行中の場合は、これ以上起動しないでください。Sun ONE Application Server をインストールするときは、必ずマスターエージェントとサブエージェントを1個ずつ使用します(全ドメイン、全インスタンスに共通)。
4737138	<p>Microsoft Windows Services や DOS プロンプトにライセンスの有効期限切れを示すメッセージが表示されない</p> <p>サーバーを、Windows の「サービス」の画面から起動した場合、および DOS プロンプトからコマンド(startserv.bat)を使用して起動した場合、たとえライセンスが期限切れになっていても、ライセンスの期限切れを示す適切なメッセージが表示されません。</p> <p>解決法</p> <p>CLI(asadmin) または Sun のプログラムアイコンからサーバーを起動します。</p>
4780488	<p>複数の obj.conf ファイルが存在すると、混乱が生じる</p> <p>Sun ONE Application Server インスタンスを作成すると、<i>instance-dir/config/</i> ディレクトリに <i>obj.conf</i> と <i>virtual-server-name-obj.conf</i> と呼ばれる 2 つの <i>obj.conf</i> ファイルが格納されます。<i>virtual-server-name</i> はインスタンスの作成時に自動的に作成される仮想サーバーのインスタンス名です。このマニュアルでは、対象の仮想サーバーと関連する <i>obj.conf</i> ファイルを変更することを、「<i>obj.conf</i> ファイルの変更」と表現します。</p> <p>Sun ONE Application Server がインストールされている場合、<i>obj.conf</i> と <i>server1-obj.conf</i> ファイルは <i>/domains/domain1/server1/config/</i> ディレクトリに格納されます。<i>obj.conf</i> ファイルの内容は仮想サーバーレベルで指定された <i>server1-obj.conf</i> ファイルの内容に置き換えられます。Sun ONE Application Server インスタンスは <i>obj.conf</i> を使用しません。</p> <p>たとえば、Web サーバープラグインを使って Sun ONE Application Server を設定する際、<i>obj.conf</i> ファイルを変更すると、不正な <i>obj.conf</i> ファイルが変更されるので、パススルー設定が有効になりません。</p> <p>解決法</p> <p>あるインスタンスの <i>obj.conf</i> ファイルを変更する必要がある場合は、<i>obj.conf</i> の前に対象の仮想サーバー名が付加されたファイルを変更します。</p>

ID	要約
4938319	<p>SSL および Web Server (逆プロキシ) プラグインを使用しているときにエラーが発生する</p> <p>SSL および Web Server プラグインを使用しているときに、502 エラーが発生します。</p> <p>解決法</p> <p>Sun ONE Web Server の <code>magnus.conf</code> ファイルと Sun ONE Application Server の <code>init.conf</code> ファイルの <code>keepAliveTimeout</code> 値を同じ値に設定します。これらの値が異なっていると、Application Server から Web Server に接続しているとき、または Web Server から Application Server に接続しているときに、接続が閉じることがあります。接続がすでに閉じている場合は、502 エラーが表示されます。</p>
6092475	<p>Intel ベースのハードウェア (Solaris x86、Linux、Microsoft Windows など) 上で Sun ONE Web Server 6.1 と Web Server (逆プロキシ) プラグインを実行すると、過負荷状態となった場合に Sun ONE Web Server がクラッシュおよび再起動することがある</p> <p>解決法</p> <p>この問題を修正するには、<code>magnus.conf</code> ファイルで次の構成変更を行い、Web Server インスタンスを再起動します。</p> <pre>KernelThreads 1 RqThrottle 1</pre> <p>このような変更によって、Sun ONE Web Server 6.1 は、Intel ベースのハードウェア上で適切に調整されない NSCP スレッドを作成するのではなく、Intel プラットフォームハードウェア上の固有の OS スレッドを使用するようになります。</p> <p>これらの設定は、Sun Solaris SPARC などのほかのハードウェアプラットフォームでは必要ありません。</p>

ID	要約
6157476	<p>UNIX プラットフォームで、Sun ONE Application Server のドメインおよびインスタンスの「sysuser」と同一グループ内のユーザーが、配備されたアプリケーションへの書き込みアクセス権を持っていない</p> <p>解決法</p> <p>この問題の回避方法:</p> <ol style="list-style-type: none">1. -sysuser オプションでドメインを作成します。2. システムユーザーとして、コマンドプロンプトで <code>umask 2</code> を実行し、ユーザーマスクを 2 に変更します。この変更によって、Sun ONE Application Server で作成されたすべてのファイルに対してグループ書き込み許可が与えられます。3. 管理サーバーを再起動します。4. インスタンスディレクトリ内で <code>chmod -R 775 applications</code> を実行し、サーバーインスタンスのアプリケーションディレクトリに対してグループ書き込み許可を与えます。 <p>これで、配備されたアプリケーションのファイルに対して、グループ書き込み許可が与えられます。追加の背景的知識と詳細情報については、『Info Doc 77800』を参照してください。</p>

管理インタフェース

管理インタフェースを使用するときは、ブラウザがキャッシュからではなくサーバーから最新のページを取り出す設定になっているかどうかを確認してください。一般に、デフォルトのブラウザ設定では問題は発生しません。

- Internet Explorer では、「ツール」->「インターネットオプション」->「設定」を選択し、「保存しているページの新しいバージョンの確認」で「確認しない」が選択されていないことを確認します。
- Netscape では、「編集」->「設定」->「詳細」->「キャッシュ」->「キャッシュにあるページとネットワーク上のページの比較」を選択し、「しない」が選択されていないことを確認します。

この節では、Sun ONE Application Server 7 の管理用グラフィカルユーザーインタフェースに関する既知問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4722607	<p>Microsoft Windows 2000 では、新しく作成された MIME ファイルに .types 拡張子が付いていないと、このファイル内のエントリを編集または削除できない</p> <p>Windows 2000 では、MIME ファイル名に必ず .types 拡張子を付けます。そうしないと、ファイル内のエントリを編集できません。MIME ファイル名は、mime2 ではなく mime2.types のようになります。</p> <p>解決法</p> <p>MIME ファイル名には必ず .types 拡張子を付けてください。</p>

ID	要約
4725473	<p>管理インタフェースのニックネームリストに外部証明書のニックネームが表示されない</p> <p>Sun ONE Application Server 管理インタフェースを使って外部証明書をインストールした場合、外部暗号化モジュール上にインストールされた証明書を使って HTTP リスナーで SSL を有効にしようとすると問題が発生します。証明書は正しくインストールされていますが、管理インタフェースに証明書のニックネームが表示されません。</p> <p>解決法</p> <ol style="list-style-type: none">1. 管理ユーザーとして、Sun ONE Application Server のインストールマシンにログインします。2. HTTP リスナーと外部暗号化モジュール上にインストールされた証明書をリンクします。asadmin コマンドを実行します。asadmin コマンドの詳細については、asadmin(1M) のマニュアルページを参照してください。 <pre>/sun/appserver7/bin/asadmin create-ssl --user admin --password password --host host_name --port 8888 --type http-listener --certname nobody@apprealm:Server-Cert --instance server1 --ssl3enabled=true --ssl3tlsciphers +rsa_rc4_128_md5 http-listener-1</pre> <p>このコマンドは、証明書とサーバーインスタンスをリンクします。証明書のインストールは行いません (証明書は管理インタフェースを使用してインストール済み)。証明書と HTTP リスナーのリンクは確立されていますが、HTTP リスナーは SSL 以外のモードで待機します。</p> <ol style="list-style-type: none">3. 次の CLI コマンドを使って、HTTP リスナーが SSL モードで待機するように設定します。 <pre>/sun/appserver7/bin/asadmin set --user admin --password password --host host_name --port 8888 server1.http-listener.http-listener-1.securityEnabled=true</pre> <p>このコマンドは、サーバーインスタンスの待機モードを SSL 以外のモードから SSL へ切り替えます。</p> <p>上記の手順が完了すると、管理インタフェースに証明書が表示されます。</p> <ol style="list-style-type: none">4. これで、管理インタフェースを使って HTTP リスナーを編集できる状態になりました。

ID	要約
4728718	<p>新しい仮想サーバーを作成し、ログファイルの場所を示す値を指定すると、「ファイルが見つかりません」というエラーが報告される</p> <p>管理インタフェースのログファイルフィールドでは、値を追加できません。</p> <p>解決法</p> <p>作成した仮想サーバーをいったん削除し、必要なファイルを作成します。その後、再度仮想サーバーを作成します。</p> <p>注：この問題の発生を防止するには、新しい仮想サーバーを作成する前にログファイルを作成するようにします。</p>
4741123	<p>Solaris 9 update 2 のデフォルトのブラウザは、Sun ONE Application Server 7 と互換性がない</p> <p>Solaris 9 4/03 オペレーティング環境のデフォルトのブラウザで Sun ONE Application Server の管理インタフェースを使用しようとする、次のエラーメッセージが表示されます。</p> <p>サポートされていないブラウザ : Netscape 4.79</p> <p>Netscape 4.79 または Netscape 6.2 (またはそれ以降) のブラウザにアップグレードすることを推奨します。アップグレードせず現状のままご使用になった場合パフォーマンスの劣化や予期せぬ現象を引き起こす原因となります。</p> <p>注 : Solaris 9 4/03 オペレーティング環境に含まれている Sun ONE Application Server の管理インタフェースを実行中の場合は、Netscape 4.79 または 7.0 を使用する必要があります。</p> <p>解決法</p> <ul style="list-style-type: none">• スタンドアロンの Sun ONE Application Server 7 用のブラウザを Netscape 4.79 あるいは Netscape 6.2 にアップグレードするには、<code>/usr/dt/bin/netscape</code> ではなく、<code>/usr/dt/bin/netscape6</code> を使います。• Solaris にバンドルされている Sun ONE Application Server 7 用のブラウザを Netscape 4.79 あるいは Netscape 7 にアップグレードするには、<code>/usr/dt/bin/netscape</code> ではなく、<code>/usr/dt/appconfig/SUNWns/netscape</code> を使います。
4750616	<p>Netscape Navigator の一部のバージョンではアクセス制御リスト (ACL) の編集がサポートされない</p> <p>Netscape Navigator バージョン 6.x または 7.x の使用時に ACL エントリを編集しようとする、ブラウザが表示されなくなる、ACL 編集画面が表示されないなどの問題が断続的に発生します。</p> <p>解決法</p> <p>次のいずれかの措置をとります。</p> <ul style="list-style-type: none">• サポートされている Netscape Navigator 4.79 を使用します。• 手動で ACL ファイルを編集します。ACL ファイル形式の詳細については、『Sun ONE Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

ID	要約
4752055	<p>Netscape 4.8 を使用すると、管理インタフェースに警告メッセージが表示される</p> <p>Netscape 4.8 を使って管理インタフェースにアクセスすると、Netscape 4.8 はサポートされていないブラウザであるという警告メッセージが表示されます。Netscape 4.8 で管理インタフェースを実行しても問題は確認されていませんが、より徹底したテストが必要とされています。</p> <p>解決法</p> <p>引き続き管理インタフェースを使用する場合は、警告メッセージの「継続」リンクを選択します。</p> <p>Netscape 4.79 を使用するか、Netscape 6.2 にアップグレードします。</p>
4760714	<p>「証明書インストール」画面に無効な「ヘルプ」ボタンが表示される</p> <p>「証明書インストール」画面には、入力された証明書情報が一覧表示されます。管理インタフェースのこの画面に無効な「ヘルプ」ボタンが表示されます。このボタンをクリックすると、ヘルプページが見つからないというエラーメッセージが表示されます。コンテキストヘルプを使用するには、ページ上部の「ヘルプ」リンクをクリックする必要があります。</p> <p>解決法</p> <p>コンテキストヘルプを使用するには、ページ上部の「ヘルプ」リンクをクリックします。</p>
4760939	<p>SSL:「証明書ニックネーム」に certutil によって生成された自己署名付き証明書が表示されない</p> <p>自己署名付き証明書が certutil によって生成されていると、管理インタフェースに「証明書ニックネーム」が表示されません。</p> <p>解決法</p> <p>自己署名付き証明書を使用する場合は、server.xml ファイルを手動で編集する必要があります。</p>
4848146	<p>ブラウザでプロキシサーバーを使用している場合、管理インタフェースへアクセスするとエラーが発生する</p> <p>ブラウザがプロキシサーバーを使用するように設定されていて、そのプロキシサーバーでローカルホストを無視するように設定されていない場合、「スタート」メニューから「Start Admin Console」を選択するとエラーが発生します。</p> <p>解決法</p> <p>プロキシサーバーを無効にします。</p> <p>または</p> <p>プロキシサーバーで無視されるドメインのリストにローカルホストを追加します。</p>

ID	要約
4957860	<p>Red Hat Enterprise Linux AS 3.0 上で、MIME タイプを追加できない</p> <p>管理インタフェースを使用して、MIME タイプファイルに MIME タイプを追加しようとすると、エラーが表示され、「Global MIME Types」ページにアクセスできません。</p> <p>解決法</p> <p>この問題は、デフォルトのロケールが、en_US ではなく en_US.UTF-8 に設定されているために発生します。この問題を解決するには、export LANG=en_US と設定し、管理サーバーを再起動します。</p>
5011969	<p>Solaris x86 で、管理インタフェースの HTTP リスナーページと IIOP リスナーページにエラーが発生する</p> <p>解決法</p> <p>この問題は、jss3.jar の特定のバージョンで発生します。次の 2 つの回避策があります。</p> <ol style="list-style-type: none">パッチレベル 115924-03、115925-03、115926-03、115927-03 で、SUNWjss パッケージを最新のバージョンにアップグレードします。サーバーのクラスパスから jss3.jar へのパスを削除します。クラスパスを削除するには、server.xml を開いて編集します。クラスパスから usr/share/lib/mps/secv1/jss3.jar を削除します。明示的に変更していない場合、これはクラスパスの最初のエントリです。server.xml を保存して、asadmin reconfig を実行します。サーバーインスタンスを起動する前に、jss3.jar の名前を変更する必要があります。

Sun ONE Studio 4 プラグイン

この節では、Sun ONE Studio 4, Enterprise Edition (旧称 Forte for Java) の既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4689097	<p>Sun ONE Studio 4 によって使用されるディレクトリのパスに空白文字があるとエラーが発生する</p> <p>ディレクトリ構造に空白文字が含まれていると、Sun ONE Studio 4 が正常にインストールされません。インストーラはインストールパスの空白文字をチェックし、発見するとエラーダイアログを表示します。</p> <p>解決法</p> <p>Sun ONE Application Server の Sun ONE Studio 4 コンポーネントのインストールディレクトリを指定するときは、空白文字を使用しないでください。</p>
4720145	<p>デバッガへの接続中に ConnectionException がスローされる</p> <p>新しいデバッグセッションを作成するかどうかを確認するメッセージが繰り返し表示され、例外がスローされます。</p> <p>解決法</p> <p>IDE を再起動します。</p>
4727932	<p>FFJ で MAD 環境を使用すると問題が発生する</p> <p>Sun ONE Studio 4 で MAD 設定を使用すると、断続的に問題が発生します。</p> <p>解決法</p> <p>Sun ONE Studio 4 では MAD 設定を使用しないでください。</p>
4725779	<p>事前に設定された Sun ONE 固有のプロパティー値がエディタに表示されない</p> <p>Sun ONE Application Server に配備するためにすでに設定された RAR ファイルがある場合、プロパティーシートでこのファイルのプロパティー値を確認しようとすると、デフォルトの値だけが表示されます。sun-ra.xml ファイルに指定された値は表示されません。</p> <p>解決法</p> <p>RAR から Sun 固有の記述子 XML ファイルを抽出し、RAR と同じディレクトリに置きます。これで、slas 記述子を編集できるようになります。</p> <p>注: この方法でファイルを編集しても、RAR ファイルの元のコンテンツは変更されません。ただし、サーバーに送信された RAR ファイルには、更新された XML ファイルの内容が追加されます。</p>

ID	要約
4733794	<p data-bbox="239 241 976 265">アプリケーションノードに適用した EJB 名の変更を配備できない</p> <p data-bbox="239 288 1226 432">アプリケーションノードのコンテキストメニュー (右クリックメニュー) から「EJB 名を表示」を選択したときに表示されるダイアログを使って、アプリケーションのコンテキストで Bean の ejb-name 要素を変更できます。これらの変更は、パッケージ化の一環として作成された alt-dd に適用されます。名前の変更は Sun ONE Application Server の alt-dd には伝達されません。</p> <p data-bbox="239 453 315 477">解決法</p> <p data-bbox="239 498 465 522">解決法はありません。</p>

ID	要約
4745283	<p>管理クライアントだけをインストールした場合、アプリケーションクライアントを実行できない</p> <p>管理クライアントまたは Sun ONE Studio プラグインだけをインストールした場合、アプリケーションクライアントを実行できません。アプリケーションクライアントは、管理クライアントとは別のパッケージです。</p> <p>解決法</p> <p>アプリケーションクライアントパッケージをインストールします。このためには、<code>SUNONE_INSTALL_ROOT/bin</code> に格納されている <code>appclient</code> スクリプトを使って完全インストールを実行するか、Sun ONE Application Server がインストールされているリモートマシンから <code>appclient</code> パッケージを取得します。</p> <p><code>appclient</code> パッケージを取得する方法は次のとおりです。</p> <ol style="list-style-type: none">1. <code>SUNONE_INSTALL_ROOT/bin/package-appclient[.bat]</code> を実行します。 <p><code>SUNONE_INSTALL_ROOT/lib/appclient/appclient.jar</code> に <code>appclient.jar</code> ファイルが生成されます。</p> <ol style="list-style-type: none">2. Sun ONE Application Server がインストールされていないリモートマシンに <code>appclient.jar</code> を配備し、<code>appclient.jar</code> を展開します。アプリケーションクライアントライブラリと JAR ファイルが格納されているアプリケーションクライアントディレクトリが作成されます。3. <code>appclient.jar</code> ファイルに格納されている <code>bin/appclient</code> スクリプトを編集します。スクリプトをはじめて使用する前に編集を済ませておいてください。<code>%CONFIG_HOME%</code> 文字列は <code>asenv.conf</code> の実際のパス (Windows 2000 の場合は <code>asenv.bat</code>) で置き換えられます。4. <code>asenv.conf</code> (Microsoft Windows の場合は <code>asenv.bat</code>) を次のように設定します。 <pre>%AS_INSTALL%=APPCLIENT_INSTALLED_ROOT %AS_JAVA%=Your_Installed_Java_Home %AS_IMQ_LIB%=APPCLIENT_INSTALLED_ROOT/imq/lib %AS_ACC_CONFIG%=APPCLIENT_INSTALLED_ROOT/config/sun-acc.xml %AS_WEBSERVICES_LIB%=APPCLIENT_INSTALLED_ROOT/lib</pre> <p>注: <code>appclient.jar</code> ファイルは、このファイルが作成されたマシンと同じオペレーティングシステムを実行しているリモートマシンから実行しなければなりません。たとえば、Solaris プラットフォームで作成された <code>appclient.jar</code> は、Windows 2000 上では機能しません。</p> <p>詳細については、<code>package-appclient</code> のマニュアルページを参照してください。</p>

サンプルアプリケーション

- ANT ディレクトリ構造とともにサンプルアプリケーションソースが用意されています。ただし、Sun ONE Studio 用のアプリケーションではないので、EJB モジュールなどのアイコンは表示されません。サンプルの src フォルダをマウントすると、ソースファイルだけが表示されます。
- Sun Java Studio は ANT 対応ですが、ANT ターゲットを使ってサンプルアプリケーションを配備することはできません。つまり、ANT target = all コマンドの実行結果と、シェルから ant all コマンドを実行したときの結果は同じにはなりません。
- 既存の ANT 型アプリケーションは、Sun Java Studio (Sun Java Studio の ANT) を使って正常にコンパイルできます。

この節では、Sun ONE Application Server 7 のサンプルアプリケーションに関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4714439	<p>PetStore では、すでに存在するユーザーを重複して追加することができない</p> <p>PetStore サンプルアプリケーションでは、すでに存在するユーザーを追加しようとする、画面にスタックトレースが表示されます。</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>
4726161	<p>変更されたサンプルは、再配備しないかぎり更新されない</p> <p>アプリケーションに小さな変更を加えて再パッケージ化してから、サンプルを再配備すると、次のエラーメッセージが表示されます。</p> <p>「Already Deployed」</p> <p>この問題は Ant ユーティリティと common.xml ファイルを使用しているサンプルで発生します。このユーティリティとファイルには配備ターゲットが存在するため、アプリケーションの配備とリソースの登録が混同されるからです。</p> <p>解決法</p> <p>次のいずれかの措置をとります。</p> <p>Ant ユーティリティ build.xml ファイルを使用するサンプルアプリケーションの多くには、common.xml ファイルが含まれています。この場合は、次のコマンドを入力してください。</p> <pre>% asant deploy_common</pre> <p>それ以外のサンプルアプリケーションの場合は、次のコマンドを入力してください。</p> <pre>% asant undeploy % asant deploy</pre>

ID	要約
4733412	<p data-bbox="319 239 1300 296">サンプルアプリケーションコンバータの Web モジュール内に余計な JAR ファイルがある</p> <p data-bbox="319 317 1300 404">コンバータアプリケーションの WEB-INF/lib ディレクトリ内に、余計なステートレスコンバータ EJB JAR ファイルがあります。EAR ファイルは、サンプルアプリケーションディレクトリ内にあります。バンドル版の Solaris ビルドでは、次の場所にあります。</p> <pre data-bbox="319 421 1300 446">/usr/appserver/samples/ejb/stateless/converter/stateless-converter.ear</pre> <p data-bbox="319 466 1300 581">このファイルを抽出して、stateless-converter という名前の Web モジュールの WEB-INF/lib ディレクトリに移動すると、余計な JAR ファイルが見つかります。この JAR ファイルは、EJB モジュールを呼び出すすべての Web モジュールに適用されます。問題の原因は、アプリケーションのビルド時に使用する common.xml ファイルにあります。</p> <p data-bbox="319 600 394 624">解決法</p> <p data-bbox="319 645 1258 670">解決法はありません。サンプルアプリケーションの実行時の機能には影響はありません。</p>
4739854	<p data-bbox="319 690 896 715">asadmin を使ったリソースの配備方法の説明がない</p> <p data-bbox="319 736 1300 793">一部のサンプルのマニュアルには、asadmin コマンドを使ってアプリケーションを配備するようにと記述されているだけで、必要なリソースを作成する手順が記載されていません。</p> <p data-bbox="319 812 394 836">解決法</p> <p data-bbox="319 857 1300 944">asadmin コマンドを使ってアプリケーションまたはリソースを配備できます。サンプルの build.xml ファイルからは詳細情報を取得できます。詳細情報は、asant deploy の実行結果からも確認できます。</p> <p data-bbox="319 963 1300 1020">JDBC/BLOB の例の場合、次の手順で、asadmin を使ってリソースを作成します。なお、ホスト名は jackiel2 とします。</p> <p data-bbox="319 1039 1300 1126">管理サーバーのユーザー名、パスワード、ポートは、それぞれ admin、adminadmin、4848 とします。asadmin create-jdbc-connection-pool --port 4848 --host jackiel2 --password adminadmin --user admin jdbc-simple-pool</p> <pre data-bbox="319 1144 1300 1196">--datasourceclassname com.pointbase.jdbc.jdbcDataSource--instance server1</pre> <pre data-bbox="319 1215 1300 1267">asadminset --port 4848 --host jackiel2 --password adminadmin --user admin</pre> <pre data-bbox="319 1286 1300 1338">server1.jdbc-connection-pool.jdbc-simple-pool.property.DatabaseName=jdbc:pointbase:server://localhost/sun-appserv-samples</pre>

ID	要約
4747534	<p>lifecycle-multithreaded サンプルアプリケーションでは、管理ユーザーのパスワードを 8 回も入力しなければならない</p> <p>asant deploy コマンドを使ってサンプルアプリケーションファイル lifecycle-multithreaded.jar を配備する場合、管理ユーザーのパスワードを 8 回入力する必要があります。</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>
4748535	<p>その他のサンプルファイルの問題</p> <ol style="list-style-type: none">1. Logging サンプルの 4 番目のログオプションで複数のログファイルが生成される。2. Logging サンプルには余計な log.properties ファイルが含まれている。3. サンプルのマニュアルに記載されているセキュリティに関する説明が一部間違っている。 <p>解決法</p> <ol style="list-style-type: none">1. ハンドラを閉じてから削除します。GreeterServlet.java 内の initLog() メソッドを参照してください。 <pre>private void initLog(String log_type) { // Remove all handlers Handler[] h = logger.getHandlers(); for (int i = 0; i < h.length; i++) { h[i].close(); //must do this logger.removeHandler(h[i]); } ... }</pre> <p>さらに、append オプションを指定してファイルハンドラを開きます。 GreeterServlet.java の addHandler() メソッドを見つけてください。以下の記述で</p> <pre>Handler fh = new FileHandler(log_file, true);</pre> <p>次の行を置き換えます。</p> <pre>Handler fh = new FileHandler(log_file);</pre> <ol style="list-style-type: none">2. build.xml ファイルを次のように編集します。 <pre>< <fileset dir="\${src.docroot}" excludes="cvs,annontation"/> > <fileset dir="\${src.docroot}" excludes="cvs,annontation,log.properties"/></pre> <ol style="list-style-type: none">3. 「Running the Sample Application」節で、server.policy ファイルにセキュリティー許可エントリを追加する方法の説明から domains/domain1/ を除去します。

ID	要約
4752731	<p>PointBase 4.3 の PointBase 4.4 への置き換え</p> <p>サンプルとともに PointBase をダウンロードし、インストールする手順の説明 (http://hostname:port/samples/docs/pointbase.html) に、PointBase 4.3 という記述があります。正しくは PointBase 4.4 です。</p> <p>解決法</p> <p>「Update Samples Ant Files」の節では、pbtools43.jar ファイルと pbclient43.jar ファイルの代わりに pbtools44.jar ファイルと pbclient44.jar ファイルを使用してください。</p> <p>「Starting PointBase」の節は、UNIX プラットフォーム上に個別にダウンロードし、インストールする PointBase について説明しています。ここで、PointBase の起動には、<code>pointbase_install_dir/tools/server/start_server</code> を使用してください。</p>
5012233	<p>コネクタサンプルの cci.ear ファイルで配備に失敗した</p> <p>外部エンティティが</p> <p>「http://www.sun.com/software/sunone/appserver/dtds/sun-application-client_1_3-0.dtd」を検出できなかったことを示すエラーメッセージが表示されます。</p> <p>解決法</p> <p>sun-application-client.xml を、二重引用符でなく単一引用符を使用するように変更します。</p> <p>サンプル:</p> <pre><!DOCTYPE sun-application-client PUBLIC "-//Sun Microsystems, Inc.//DTD Sun ONE Application Server 7.0 Application Client 1.3//EN" 'http://www.sun.com/software/sunone/appserver/dtds/sun-application-client_1_3-0.dtd'></pre>

ORB/IIOP リスナー

この節では、ORB/IIOP-Listener に関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4743366	<p>server.xml ファイル内の iiop-listener 要素の address 属性には ANY を指定できない</p> <p>デフォルトの設定では、Sun ONE Application Server の iiop-listener 要素のアドレス値は 0.0.0.0 です。このデフォルト設定は、IPv6 インタフェース上で待機しません。システムの IPv4 インタフェース上で待機するだけです。iiop-listener の address 要素の値を ANY にすると、サーバーはシステム上の全インタフェース (IPv4 または IPv6) で待機できますが、この機能はサポートされていません。</p> <p>server.xml ファイル内の iiop-listener 要素の address 属性値を ANY にすると、システムの全インタフェース上での待機が可能になり、IPv4 インタフェースと IPv6 インタフェースが両方ともサポートされます。</p> <p>解決法</p> <p>IPv4 インタフェースと IPv6 インタフェースで、iiop-listener 要素の address の値を "::" にします。この方法は、Solaris 8.0 以上にのみ適用可能です。</p>
4743419	<p>IPv6 アドレスの DNS アドレス検索が失敗する場合、IPv6 アドレスでは RMI-IIOP クライアントが機能しない</p> <p>IPv6 アドレスの DNS 検索が失敗する場合、IPv6 アドレスでは、RMI-IIOP (Remote Method Invocation-Internet Inter-ORB Protocol) のクライアントが機能しません。</p> <p>解決法</p> <p>IPv6 アドレスを検索できるように、配備サイトに DNS (Domain Name Service) を設定します。</p>

ID	要約
4810199	<p>Sun ONE Application Server 7.0 Standard Edition にバンドルされている最適化した CORBA Util delegate をデフォルトで使用できない</p> <p>Sun ONE Application Server 7 のデフォルトのインストールでは高パフォーマンス CORBA Util delegate を使用できません。その結果、JDK バンドル版あるいは Sun ONE Application Server バンドル版の ORB を使用すると、パフォーマンスが著しく低下します。</p> <p>詳細については、『Sun ONE Application Server パフォーマンスチューニングガイド』の「ORB のチューニング」モジュールにある「優れたパフォーマンスの CORBA Util Delegate クラス」の節を参照してください。</p> <p>解決法</p> <p>高パフォーマンス CORBA Util Delegate 実装を使用可能にすると、パフォーマンスが著しく向上します。代替の CORBA Util Delegate を有効にするには、Sun ONE Application Server 設定ファイルの server.xml に次のコマンドを追加します。</p> <pre><jvm-options>-Djavax.rmi.CORBA.UtilClass=com.ipplanet.ias.util.orbutil.IasUtilDelegate</jvm-options></pre>
4847269	<p>J2SE 1.3.1_X クライアントが Sun ONE Application Server 7 と通信できない</p> <p>J2SE 1.3.1_X クライアントが Sun ONE Application Server 7 と通信しているときに、クライアントがコアダンプします。</p> <p>解決法</p> <p>このクライアントには、J2SE 1.3.1_04 を使用してください。</p>

国際化 (i18n)

この節では、国際化に関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
6358183	<p>7.0 UR4 に Red Hat Linux での zh ロケールのサポートがなかったため、7.0 UR8 には zh ロケールのアップグレードサポートがない</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>

ID	要約
4761017	<p>Solaris バンドル版の場合：管理インタフェースが英語で表示される</p> <p>Solaris バンドル版には、管理サーバーインスタンス用の言語エントリがないので、Sun ONE Application Server 管理インタフェースのローカライズ版では管理インタフェースも英語で表示されます。</p> <p>解決法</p> <p>server.xml ファイルに手動でロケールのエントリを設定します。</p>
4957904	<p>ユーザーは、インストール後に中国語版の管理インタフェースを起動できない</p> <p>中国語版の Sun ONE Application Server をインストールしたあとの管理インタフェースは英語で表示されます。</p> <p>解決法</p> <p>server.xml ファイルに手動でロケールのエントリを設定し、サーバーを再起動します。</p>
なし	<p>Solaris では Netscape 4.79 ブラウザに関連して、次の制限がある</p> <ul style="list-style-type: none">• Solaris で Netscape 4.79 を使用すると、ローカライズされた JavaScript メッセージが文字化けします。JavaScript では UTF-8 エンコードを処理できません。• Chinese GB18030 ロケールの Solaris で Netscape 4.79 を使用しても、GB18030 文字を使用できません。 <p>解決法</p> <p>Sun の Web サイトから Solaris 版の Netscape 6.23 または 7.0 をダウンロードします。これで両方の問題が解決します。</p>
6206333	<p>Microsoft Windows では、管理インタフェースの「MIME ファイルを編集」ページにアクセスすると、簡体字中国語版で内部エラーが発生する</p> <p>解決法</p> <p>テキストエディタを使用して mime.type ファイルを編集します。ファイルは、<code>install_dir/Appserver7/domains/domain_name/instance_name/config/mime.type</code> にあります。</p> <p>次に例を示します。</p> <p><code>C:¥Sun¥Appserver7¥domains¥domain1¥server1¥config¥mime.type</code></p>

マニュアル

この節では、マニュアルに関する既知の問題とその解決方法を示します。

ID	要約
4839719	<p>『Developer's Guide to Web Applications』 : cookieName プロパティの説明が紛らわしい</p> <p>『Developer's Guide to Web Applications』の sun-web.xml ファイルを説明している箇所に、cookie-properties サブ要素の cookieName プロパティの説明があり、cookieName プロパティの値をデフォルト値から変更できるように解釈できます。しかし、この値は変更できません。常に JSESSIONID でなければなりません。</p> <p>解決法</p> <p>解決法はありません。</p>

ID	要約
4720171	<p>インデックス付き配備ディレクトリの使用方法を説明したマニュアルがない</p> <p>配備済みアプリケーションのディレクトリ名のナンバリングスキーマ部分は、開発者が配備済みアプリケーションに関連付けられた JAR ファイルやクラスファイルを変更するときに使用するインデックス機構として実装されています。Windows プラットフォームでは、このインデックス機構が重要な役割を果たします。Windows プラットフォームでは、読み込み済みのファイルを上書きしようとすると共有違反エラーが発生するため、読み込み済みのファイルはロックされます。ファイルは、セッションの起動時にサーバーインスタンスや IDE に読み込まれます。共有違反エラーが発生した場合、次のいずれかの措置をとります。</p> <ul style="list-style-type: none">• 更新されたクラスファイル (元々は JAR ファイルの一部) をコンパイルし、古いクラスよりも先に読み込まれるようにクラスパス内に配置します。次に、Sun ONE Application Server を使ってこのアプリケーションを再読み込みします (再読み込みが有効な場合)。• JAR ファイルを更新し、新しい EAR ファイルを作成して、アプリケーションを再配備します。 <p>注: Solaris プラットフォームでは、ファイルロックの制約がないため、アプリケーションを再配備する必要はありません。</p> <p>解決法</p> <p>IDE の設定、ANT ファイルのコピー、コンパイルその他の操作を行うために Windows プラットフォーム上の配備済みアプリケーションに変更を加えるときは、ファイルロックの制約を回避するため、新しく作成されるディレクトリのインデックス番号が増分する点に注意してください。次に例を示します。Solaris プラットフォームでは、J2EE アプリケーション helloworld は、次のディレクトリ構造で Sun ONE Application Server に配備されます。</p> <pre>appserv/domains/domain1/server1/applications/j2ee-apps/helloworld_1</pre> <p>さらに、この配備済みアプリケーションの一部をなすサーブレット (HelloServlet.java など) に変更が加えられます。Sun Java Studio IDE が起動し、このサーブレットのソースファイルが変更され、コンパイルされます。このとき、javac ターゲットには上記のディレクトリが設定されます。ソースのコンパイル結果が適切な場所に格納されていれば、このアプリケーションの再読み込みファイルが存在しています。また、server.xml の再読み込みフラグは true に設定されています。サーバーインスタンスの実行時は、アプリケーションを再アセンブルして再配備しなくても変更内容が有効になります。</p> <p>Windows プラットフォームでは、ファイルロックの問題により、JAR ファイルやクラスファイルの交換や更新は行えません。この場合、次のいずれかの措置をとります。</p> <ul style="list-style-type: none">• ソースの変更を有効にするには、変更済みソースファイルをコンパイルし、クラスパス内のクラスファイルまたは JAR ファイルを挿入します。• helloworld ソースに変更を加え、アセンブルし、再配備します。以前に配備した helloworld はそのままにしておきます。 <p>2 番目のオプションは、配備済みアプリケーションのディレクトリ名に付加されている増分されたインデックス番号を使用します。したがって、こちらの方式のほうが優先されます。2 番目の helloworld の配備のあと、ディレクトリ構造は次のようになります。</p> <pre>appserv/domains/domain1/server1/applications/j2ee-apps/helloworld_1 appserv/domains/domain1/server1/applications/j2ee-apps/helloworld_2</pre> <p>2 番目の helloworld は helloworld_2 の下に配備されます。</p>

ID	要約
4851218	<p>keytool を使用して、Sun ONE Application Server 用の証明書を作成できない</p> <p>keytool で生成した証明書は、Sun ONE Application Server と互換性がありません。</p> <p>解決法</p> <p>certutil を使用して、自己署名付き証明書を作成することができます。certutil は、Sun ONE Application Server のアドオンとして、次の URL から入手できます。</p> <p>http://www.sun.com/software/download/app_servers.html</p> <p>certutil の使用方法については、次の URL を参照してください。</p> <p>http://www.mozilla.org/projects/security/pki/nss/tools/certutil.html</p>
4870888	<p>製品に付属の『入門ガイド』の記述に間違いがある</p> <p>製品に付属の『入門ガイド』に、プラットフォームとサイズに関して間違った説明が記載されています。また、このガイドは 508 に完全には準拠していません。</p> <p>解決法</p> <p>プラットフォームとサイズに関する正しい情報については、『インストールガイド』または『プラットフォームの概要』を参照してください。508 に準拠した『入門ガイド』については、次の URL にあるマニュアルを参照してください。</p> <p>http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja</p>

ID	要約
4875280	<p>オンラインヘルプに間違った説明がある</p> <p>解決法</p> <ul style="list-style-type: none">• asprfhls.html ファイル <p>SSL3 が有効になっているかどうかを確認します。管理目的の場合は、SSL2 の選択を解除して TLS だけを使用することを推奨します (ファイル名は asprfhls.html)。</p> <p>ブラウザで TLS がサポートされていない場合は、SSL3 を選択してください。</p> <p>この説明を次のように変更します。</p> <p>SSL3 が有効になっているかどうかを確認します。管理目的の場合は、SSL3 の選択を解除して TLS だけを使用することを推奨します。</p> <p>ブラウザで TLS がサポートされていない場合は、SSL3 を選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none">• asprflo.html ファイル <p>コンソールを作成</p> <p>(Window のみ)。チェックマークを付けると、stderr 出力のためにコンソールウィンドウが作成されます。</p> <p>この説明を次のように変更します。</p> <p>コンソールを作成</p> <p>(Windows のみ)。チェックマークを付けると、stderr 出力のためにコンソールウィンドウが作成されます。</p>
4884043	<p>『設定ファイルリファレンス』：転送ファイルパラメータのデフォルト値の説明が間違っている</p> <p>解決法</p> <p>nsfc.conf ファイルの TransmitFile パラメータのデフォルト値が、マニュアルで次のように記述されています。</p> <p>(UNIX の場合)</p> <p>TransmitFile=off</p> <p>実際はこのようなになっていません。「転送ファイル」チェックボックスはデフォルトで「有効」になっています。マニュアルで説明されているように、このチェックボックスは無効になっているべきです。</p>

ID	要約
4890285	<p>一部のマニュアルで Solaris x86 プラットフォームの説明が更新されていない</p> <p>Sun ONE Application Server をサポートしているプラットフォームの一覧がマニュアルに記載されていますが、Solaris x86 プラットフォームの説明が含まれていないことがあります。最新のプラットフォームの説明は、『プラットフォームの概要』を参照してください。</p> <p>『Developer's Guide to NSAPI』：このマニュアル内で「SPARC」と表記されている記述は、すべて「Solaris」に読み替えてください。「Solaris」には、SPARC 版および x86 版が含まれます。特に、158 ページと 159 ページの記述では、SPARC 版に限定している訳ではありません。</p> <p>解決法</p> <p>上記のマニュアルでは、これらの制限事項が記載されていないことがあります。4 ページの「Solaris x86 の制限事項」を参照してください。</p>
4893954	<p>Solaris cron スクリプトを使用してログローテーションを行うと Sun ONE Application Server を再起動することが『管理者ガイド』に記載されていない</p> <p>解決法</p> <p>次の 2 種類のログローテーションを使用できます。</p> <p>内部デーモンによるログローテーションは、HTTP デーモン内で実行され、起動時にのみ設定できます。内部デーモンによるログローテーションを使用すると、サーバーを再起動しなくともサーバーの内部でログをローテーションさせることができます。</p> <p>スケジュールベース (cron ベース) のログローテーションは、サーバー起動時に初期化されます。ローテーションが有効になっている場合、サーバーは、タイムスタンプが記録されたアクセスログファイルを作成し、ローテーションはサーバーの起動時に開始されます。このタイプのログローテーションでは、内部的に <code>rotatelog</code> スクリプトが呼び出され、このスクリプトがアプリケーションサーバープロセスを再起動します。</p>
4896094	<p>『管理者ガイド』：インストール時に <code>ACC_CONFIG</code> 変数を設定する手順が必要</p> <p>解決法</p> <p>『管理者ガイド』には、ドメインとサーバーインスタンスを作成したあとに、<code>ACC_CONFIG</code> 変数を設定するための手順が記載されていません。『Sun ONE Application Server 管理者ガイド』の「アプリケーションの配備」節のあとに、次の説明を追加する必要があります。</p> <p>上記の手順以外に、<code>asenv.conf</code> ファイルを変更する必要があります。ドメインを作成したら、<code>AS_ACC_CONFIG</code> 変数の値を <code>server_instance_config</code> ディレクトリの <code>sun-acc.xml</code> ファイルに設定します。この値が正しく設定されていないと、Application Client Container (ACC) に関連するアプリケーションを実行しているときに、エラーが発生する場合があります。次に例を示します。</p> <pre>AS_ACC_CONFIG=/var/appserver/domains/domain1/server1/config/sun-acc.xml</pre> <p><code>server1</code> は、作成したアプリケーションサーバーのインスタンスです。</p>

ID	要約
4913290	<p>フォームベースの認証が、6.5 の場合と同じ機能を提供しない</p> <p>iPlanet Application Server 6.5 で開発された、フォームベースの認証を使用するアプリケーションは、認証フォームまたはログインページに対して要求パラメータを渡すことができるので、6.5 ではログインページをカスタマイズして、入力パラメータを基にした認証パラメータを表示することができます。</p> <p>解決法</p> <p>Sun ONE Application Server 7 では、ログインページを表示しているときに要求パラメータを渡すことはできません。フォームベースの認証を使用し、要求パラメータを渡すアプリケーションは、Sun ONE Application Server 7 に移行できません。このようなアプリケーションを Application Server 7 に移植するには、コードを大幅に変更する必要があります。代わりに、入力パラメータをセッション内に保存し、ログインページの表示中に取得することができます。</p> <p>次にこの問題を解決するためのコードの例を示します。</p> <p>6.5 での変更前のコード</p> <pre>-----index-65.jsp ----- <%@page contentType="text/html"%> <html> <head><title>JSP Page</title></head> <body> go to the secured area </body> </html> -----login-65.jsp----- <%@page contentType="text/html"%> <html> <head> </head> <body> <!-- ログインフォームの出力 --> <h3>Parameters</h3>
 <%out.println("arg1 is " + request.getParameter("arg1")); %> <%out.println("arg2 is " + request.getParameter("arg2")); %> </body> </html></pre>

ID	要約
4913290 (続き)	<p>7.0 での変更後のコード</p> <pre>-----index-7.jsp ----- <%@page contentType="text/html"%> <html> <head><title>JSP Page</title></head> <body> <%session.setAttribute("arg1","test"); %> <%session.setAttribute("arg2","me"); %> go to the secured area </body> </html></pre> <p>index-7.jsp には、要求パラメータをセッション内に保存する方法が示されます。</p> <pre>-----login-7.jsp----- <%@page contentType="text/html"%> <html> <head> </head> <body> <!-- ログインフォームの出力 --> <h3>Parameters</h3>
 <!-- セッションからのパラメータの取得 --> <%out.println("arg1 is " + (String)session.getAttribute("arg1")); %> <%<>out.println("arg2 is " + (String)session.getAttribute("arg2")); %> </body> </html></pre>

ID	要約
4913611	<p>J2EE 仕様の互換性の問題について記載されていない</p> <p>解決法</p> <p>『Developer's Guide to Web Applications』: 次の記述が <code>delegate</code> 属性の説明に適用されます。</p> <p>「<code>delegate</code> フラグがデフォルト値の <code>false</code> に設定されている場合には、クラスローダの委託動作は Servlet 2.3 仕様のセクション 9.7.2 に準拠します。 <code>true</code> に設定されている場合には、コンテナ全体の JAR ライブラリファイルに含まれるクラスとリソースが、WAR ファイル内にパッケージ化されているクラスとリソースより優先して読み込まれます。この動作は、Servlet 2.3 仕様で推奨している仕様に準拠していません。</p> <p>移植性のあるプログラムで <code>delegate</code> フラグが使用されている場合は、それらのプログラムを J2EE 仕様に準拠しているクラスやインタフェースと一緒にパッケージ化しないでください。WAR ファイル内のプログラムにそのようなクラスやインタフェースが含まれる場合、そのプログラムの動作は定義されていません。</p> <p>『開発者ガイド』 および 『Developer's Guide to Enterprise JavaBeans Technology』: 次の記述が参照渡しの要素の説明に適用されます。</p> <p>「<code>pass-by-reference</code> フラグがデフォルト値の <code>false</code> に設定されている場合には、リモートインタフェースを呼び出す引数を渡す方式は EJB 仕様のセクション 5.4 に準拠します。 <code>true</code> に設定されている場合には、リモート呼び出しでは値渡しではなく参照渡しが使用されます。</p> <p>移植性のあるプログラムは、リモート呼び出しのときにオブジェクトのコピーが作成されるときには元のオブジェクトを変更しても安全である、という前提で記述しないでください。また、コピーが作成されないときには、元のオブジェクトに対する変更に対して呼び出す側と呼び出される側がアクセスできる、という前提で記述しないでください。</p> <p><code>pass-by-reference</code> フラグが設定されているときには、パラメータと戻り値は読み取り専用とみなされます。そのようなパラメータや戻り値を変更するプログラムの動作は、定義されていません。</p>
4915451	<p>『管理者ガイド』の <code>idle-timeout-in-seconds</code> の定義が間違っている</p> <p>解決法</p> <p>『Sun ONE Application Server 管理者ガイド』の第 6 章「Sun ONE Application Server の監視」に、<code>idle-timeout-in-seconds</code> の定義に次の文が含まれています。</p> <p>現在のサイズが <code>steady-pool-size</code> より小さい場合、<code>min(current-pool-size+pool+resize-quantity,max-pool-size)</code> を上限として、<code>pool-resize-quantity</code> 分だけ大きくなります。</p> <p>この記述は次のように変更してください。</p> <p>現在のサイズが <code>steady-pool-size</code> より小さい場合、<code>min(current-pool-size+pool-resize-quantity,max-pool-size)</code> を上限として、<code>pool-resize-quantity</code> 分だけ大きくなります。</p>

ID	要約
4950035, 4976502, 5024804	<p>『Sun ONE Application Server 7 パフォーマンスチューニングガイド』で、stats.xml を使用した統計の有効化に関する記述が間違っている</p> <p>解決法</p> <p>『Sun ONE Application Server 7 パフォーマンスチューニングガイド』の「Sun ONE Application Server のチューニング」の章の記述で、stats.xml を使用して統計を有効にする方法の説明に次の間違いがあります。</p> <ul style="list-style-type: none">記載されている obj.conf ファイルではなく、instance_name-obj.conf ファイルを変更する必要があります。例の記述に間違いがあります。以下のエントリについて、<pre>NameTrans fn="assign-name" from="/stats-xml/*" name="stats-xml"</pre><pre>NameTrans fn=assign-name from="/.perf" name="perf"</pre>この 2 行は次の行の前に置く必要があります。<pre>NameTrans fn=document-root root="\$docroot"</pre>このようにしないと、これらのエントリが無視されます。現在の例では、記述されている行の順序が正しくありません。 <ul style="list-style-type: none">図 4.1 および図 4.2 の紹介が間違っています。 <p>図 4.1 は、stats.xml が有効になっている instance_name-obj.conf ファイルの例です。</p> <p>図 4.2 は、stats.xml が有効になっている init.conf ファイルの例です。</p>

ID	要約
4983280, 4992520, 6078104	<p>Web サーバープラグインのインストール手順が間違っている</p> <p>『Sun ONE Application Server 管理者ガイド』に記載された Web サーバープラグインのインストール手順が間違っています。</p> <p>解決法</p> <p>次の手順を実行します。</p> <p>Sun ONE Web Server の変更</p> <p>magnus.conf や obj.conf などの重要な設定ファイルを変更する前にバックアップします。</p> <ol style="list-style-type: none">1. Web サーバーのインストール領域に、Web サーバー (パススルー) プラグインを格納するディレクトリを作成します。次に例を示します。 <pre>cd /webserver_install_dir/plugins mkdir -p passthrough/bin</pre>2. Sun ONE Application Server のインストールディレクトリからこの新しい Web サーバーディレクトリにパススループラグインをコピーします。次に例を示します。 <pre>cd appserver_install_dir/lib cp libpassthrough.so webserver_install_dir/plugins/passthrough/bin</pre> <p>Windows の場合は、passthrough.dll ファイルをコピーします。</p> <ol style="list-style-type: none">3. webserver_install_dir/https-host.domain/config の下にある magnus.conf ファイルを編集し、次の行を追加します。これらの行は、それぞれが Init で始まる 2 つの行として入力する必要があります。 <pre>Init fn=load-modules shlib="your_app_server_install/lib/libpassthrough.so "funcs="init-passthrough,auth-passthrough,check-passthrough, service-passthrough"NativeThread="no" Init fn="init-passthrough"</pre>4. webserver_install_dir/https-host.domain/config の下にある、Web サーバーの obj.conf ファイルを編集し、NameTrans 指令を追加します。1 行で入力する必要があります。NameTrans 指令は表示順に実行されるため、正しい位置に追加するようにします。位置が正しいかどうか不確かな場合は、その他のすべての NameTrans 指令の上に配置します。このファイルで空白 (スペースまたはタブ) を使用する場合には、注意が必要です。obj.conf が解析されると、空白で始まる行は前の行の指令の一部とみなされ、無視されます。次の例では、「webapp-context」という名前のコンテキストルートだけをリダイレクトしています。複数のアプリケーションに対して、複数のコンテキストルート名を追加するか、catch-all 指令 from="/*" を使用します。 <pre><Object name="default"> NameTrans fn="assign-name" from="(/webapp-context /webapp-context/*)" "name="passthrough" ... </Object></pre>

ID	要約
4983280, 4992520, 6078104 (続き)	<p>5. Sun ONE Web Server 6.0 の場合、Web サーバーの <code>obj.conf</code> ファイルに次の行を追加します。 <code>app_server.domain:port</code> を Sun ONE Application Server のサーバー名とポート番号に置き換えます。Service 行は 1 行で入力する必要があります。</p> <pre> Object name="passthrough"> ObjectType fn="force-type" type="magnus-internal/passthrough" PathCheck fn="deny-existence" path="*/WEB-INF/*" Service type="magnus-internal/passthrough" fn="service-passthrough" servers="http://app_server.domain:port" Error reason="Bad Gateway" fn="send-error" uri="/badgateway.html" </Object> </pre> <p>6. Sun ONE Web Server 6.1 の場合、Web サーバーの <code>obj.conf</code> ファイルに次の行を追加します。 <code>app_server.domain:port</code> を Sun ONE Application Server のサーバー名とポート番号に置き換えます。Service 行は 1 行で入力する必要があります。</p> <pre> Object name="passthrough"> PathCheck fn="deny-existence" path="*/WEB-INF/*" Service type="magnus-internal/passthrough" fn="service-passthrough" servers="http://app_server.domain:port" Error reason="Bad Gateway" fn="send-error" uri="/badgateway.html" </Object> </pre> <p>7. Sun ONE Web Server インスタンスを再起動します。</p> <p>認証上の理由により、Sun ONE Application Server で <code>init.conf</code> および <code>server_name-obj.conf</code> を変更しなければならない場合もあります。これらの手順は、Sun ONE Application Server で SSL を使用していない場合に Web サーバーを SSL モードで実行する場合に必要となります。この場合、次の行を適切な Sun ONE Application Server ファイルに追加していない場合は、リダイレクトが失敗します。この情報が不要な場合は、次の手順を無視してください。</p> <p>8. <code>app_server_instance/config/init.conf</code> で、それぞれ Init で始まる次の行を 2 行で追加します。</p> <pre> Init fn="load-modules" shlib="/app_server_install/lib/libpassthrough.so" funcs="init-passthrough,auth-passthrough,check-passthrough, service-passthrough"shlib_flags="(global now)" Init fn="init-passthrough" </pre> <p>9. <code>domain/server_instance/config/server_instance-obj.conf</code> に、次の行を入力します。</p> <pre> <Object name="default"> AuthTrans fn="match-browser" browser="*MSIE*" ssl-unclean-shutdown="true" AuthTrans fn="auth-passthrough" </Object> </pre>

ID	要約
4986222	<p>JMS に関するマニュアルの記述が間違っている</p> <p>マニュアルで参照している Sun ONE Message Queue のマニュアルのバージョンが間違っています。</p> <p>『管理者用設定ファイルリファレンス』と『Developer's Guide to J2EE Features and Services』に記載された <code>server.xml</code> <code>jms-service</code> プロパティの <code>instance-name</code> の説明が間違っています。</p> <p>解決法</p> <p>Sun ONE Message Queue のマニュアルの正しいバージョンについては、http://docs.sun.com/db/prod/s1.s1msggu を参照してください。</p> <p><code>jms-service</code> プロパティの <code>instance-name</code> に関する記述では、Sun ONE Message Queue ブローカインスタンス名は、常にドメインとサーバーインスタンス名を連結して名前が付けられると説明されています。この説明は正しくありません。任意の名前を使用できます。</p>
5003309	<p>『管理者ガイド』の「静的コンテンツの配備」のセクションの URL が間違っている</p> <p>解決法</p> <p>URL:</p> <p><code>http://server:port/NASApp/&ltcontext_root/index.html</code></p> <p>の正しい URL は、</p> <p><code>http://server:port/tcontext_root/index.html</code></p>
なし	<p>『J2EE CA SPI Administrator's Guide』で参照されているマニュアルのタイトルが間違っている</p> <p>『Sun ONE Application Server J2EE CA SPI 管理者ガイド』では、『Sun ONE Application Server J2EE CA SPI 開発者ガイド』が参照されています。このタイトルは正しくありません。</p> <p>解決法</p> <p>『Sun ONE Application Server 開発者ガイド』を参照する必要があります。</p>
なし	<p>『Sun ONE Application Server 管理者ガイド』で、Linux の <code>asadmin</code> ユーティリティのエスケープ文字が正しく使用されていない</p> <p>解決法</p> <p>Linux で <code>asadmin</code> コマンドをマルチモードで使用する場合は、単一の円記号を使用して、コロンのような予約文字をエスケープします。例: <code>create-jdbc-connection-pool --datasourceclassname oracle.jdbc.pool.OracleDataSource --property url=jdbc¥:oracle¥:thin¥:@1asperf¥:1521¥:ntdb01":user=testprod:password=testprod rekla-pool</code></p> <p>URL プロパティの値が、JDBC 接続文字列の適切な構文を使用して格納されます。</p>

ID	要約
5015994	<div data-bbox="318 239 971 263">推奨設定を追加することで、パフォーマンスを向上させる</div> <div data-bbox="318 286 394 310">解決法</div> <div data-bbox="318 333 1296 418"><p>以下で説明する設定を使用して、Sun ONE Application Server のデフォルトの設定を変更すると、パフォーマンスの向上を図ることができます。これらの設定は、サーバーインスタンスの <code>server.xml</code> ファイルにあります。</p></div> <div data-bbox="318 437 758 461"><p>以下の設定の追加または変更を行います。</p></div> <div data-bbox="318 484 791 508"><pre><jvm-options>-server -Xss128k</jvm-options></pre></div> <div data-bbox="318 529 801 553"><pre><jvm-options>-Xms256m -Xmx256m</jvm-options></pre></div> <div data-bbox="318 574 822 598"><pre><jvm-options>-XX:+AggressiveHeap</jvm-options></pre></div> <div data-bbox="318 619 855 644"><pre><jvm-options>-XX:+DisableExplicitGC</jvm-options></pre></div> <div data-bbox="318 664 1250 718"><pre><jvm-options>-Djavax.rmi.CORBA.UtilClass=com.ipplanet.ias.util.orbutil.IasUtilDelegate</jvm-options></pre></div> <div data-bbox="318 739 1285 793"><pre><orb message-fragment-size="1024" steady-thread-pool-size="40" max-thread-pool-size="70" idle-thread-timeout-in-seconds="300" max-connections="1024" monitoring-enabled="false"/></pre></div> <div data-bbox="318 814 1228 868"><pre><mdb-container steady-pool-size="32" pool-resize-quantity="16" max-pool-size="1024" idle-timeout-in-seconds="600" monitoring-enabled="false"></pre></div> <div data-bbox="318 888 592 913"><p>以下の設定を削除します。</p></div> <div data-bbox="318 933 1263 958"><pre><jvm-options>-Dsun.rmi.dgc.server.gcInterval=3600000</jvm-options></pre></div> <div data-bbox="318 979 1296 1034"><p>さらに、マシンに十分なメモリがある場合は、初期ヒープサイズを 1024M バイト (Solaris システムの場合は 3500M バイト) に増やします。</p></div>

ID	要約												
5031531	<p>『Sun ONE Application Server 7 パフォーマンスチューニングガイド』に、最大ヒープ領域に関する情報がない</p> <p>解決法</p> <p>最大ヒープ領域は、さまざまな要素によって変わります。</p> <ul style="list-style-type: none">• プロセスの最大アドレス領域 (maxPAS)• プロセスがスタック領域に必要とする領域 (stack)• プロセスがライブラリに必要とする領域 (libs) <p>以下の方程式は、最大ヒープ領域の値を示します。</p> $\text{MaxHeapSpace} = \text{maxPAS} - \text{stack} - \text{libs}$ <p>プロセスあたりの最大アドレス領域は、プラットフォームにより異なります。</p> <table><tbody><tr><td>x86 / Redhat Linux 32 bit</td><td>2 GB</td></tr><tr><td>x86 / Redhat Linux 64 bit</td><td>3 GB</td></tr><tr><td>x86 / Win98/2000/NT/Me/XP</td><td>2 GB</td></tr><tr><td>x86 / Solaris x86 (32 bit)</td><td>4 GB</td></tr><tr><td>Sparc / Solaris 32 bit</td><td>4 GB</td></tr><tr><td>Sparc / Solaris 64 bit</td><td>terabytes</td></tr></tbody></table> <p>スタック領域とライブラリ領域は、個別のアプリケーションにより異なります。</p>	x86 / Redhat Linux 32 bit	2 GB	x86 / Redhat Linux 64 bit	3 GB	x86 / Win98/2000/NT/Me/XP	2 GB	x86 / Solaris x86 (32 bit)	4 GB	Sparc / Solaris 32 bit	4 GB	Sparc / Solaris 64 bit	terabytes
x86 / Redhat Linux 32 bit	2 GB												
x86 / Redhat Linux 64 bit	3 GB												
x86 / Win98/2000/NT/Me/XP	2 GB												
x86 / Solaris x86 (32 bit)	4 GB												
Sparc / Solaris 32 bit	4 GB												
Sparc / Solaris 64 bit	terabytes												
6156869	<p>Sun ONE Message Queue 3.0.1 から Sun ONE Message Queue 3.5 への移行についてのマニュアルがない</p> <p>Sun ONE Application Server 7 は、Sun ONE Message Queue 3.01 と同梱されています。ただし、Sun ONE Message Queue 3.5 もサポートされます。Sun ONE Message Queue 3.01 から Sun ONE Message Queue 3.5 へ移行するには、docs.sun.com にある『Sun ONE Message Queue インストールガイド』の手順に従ってください。次のサイトを参照してください。</p> <p>http://docs.sun.com/source/817-3725/intro.html#wp23155</p>												
なし	<p>Xerces のバージョンについて記載されていない</p> <p>Sun ONE Application Server 7 では、LibXerces バージョン 1.2 および Xerces2 Java Parser 2.6.2 がサポートされます。</p>												

再配布可能なファイル

Sun ONE Application Server 7 には再配布可能なファイルは含まれていません。

問題の報告およびフィードバックの方法

Sun ONE Application Server に問題が発生した場合は、次のいずれかの方法で Sun のカスタマサポートにお問い合わせください。

- オンラインの Sun Software Support Service
<http://www.sun.com/service/sunone/software>

このサイトには、Knowledge Base、オンラインサポートセンター、ProductTracker へのリンクと、保守プログラムおよびサポートに関する問い合わせ先電話番号が記載されています。

- 保守契約を結んでいるお客様の場合は、専用ダイヤルをご利用ください。

最善の問題解決のため、サポートに連絡する際には次の情報をご用意ください。

- 問題が発生した箇所や動作への影響など、問題の具体的な説明
- マシン機種、OS バージョン、および、問題の原因と思われるパッチやその他のソフトウェアなどの製品バージョン
- 問題を再現するための具体的な手順の説明
- エラーログやコアダンプ

コメントの送付先

Sun では、マニュアルの改善に努めており、お客様のご意見、ご提案をお待ちしております。Web ベースのフォームを使用して Sun にフィードバックを送ることができます。

<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

マニュアルの完全な名称と Part No. を適切なフィールドに入力してください。Part No. は、通常 7 ～ 9 桁の番号で、マニュアルのタイトルページまたは最初のページに記載されています。たとえば、このリリースノートの Part No. は Part No. 819-5412 です。

補足情報

次のサイトにも、Sun ONE に関する役に立つ情報が掲載されています。

- Sun ONE Application Server 製品のマニュアル
<http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja>
- Sun ONE のマニュアル
<http://docs.sun.com/db/prod/entsys?l=ja>
- Sun ONE プロフェッショナルサービス
<http://jp.sun.com/service/sunps/sunone>
- Sun ソフトウェア製品とサービス
<http://www.sun.com/software>
- Sun Software Support と Knowledge Base
<http://www.sun.com/service/support/software>
- Sun サポートサービスおよびトレーニングサービス
<http://training.sun.com>
- Sun ONE コンサルティングサービスおよびプロフェッショナルサービス
<http://jp.sun.com/service/sunps/sunone>
- Sun Developer Network
<http://developers.sun.com>
- Sun 開発者サポートサービス
<http://www.sun.com/developers/support>
- Sun ソフトウェアデータシート
<http://www.sun.com/software>

Copyright © 2005 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.

本書の製品に使われている技術に関する知的所有権は、米国 Sun Microsystems, Inc. に帰属します。これらの知的所有権には、<http://www.sun.com/patents> に掲載されている米国特許、米国およびその他の国で取得済みまたは申請中の特許などがすべて含まれます。

SUN PROPRIETARY/CONFIDENTIAL.

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

ご使用はライセンス条項に従ってください。

本製品には、第三者が開発した技術が含まれている場合があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。

Sun、Sun Microsystems、Sun ロゴ、Java、および Solaris は、米国およびその他の国における Sun Microsystems, Inc. の商

標または登録商標です。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

